

岩崎隆次郎元福岡県労働組合評議会事務局長聞き取り記録

篠原, 新

山田, 良介

<https://doi.org/10.15017/1916273>

出版情報：奥田八二日記研究会会報. 1, pp.117-206, 2018-03-31. 奥田八二日記研究会(九州大学大学図書館内)

バージョン：

権利関係：

【資 料】

岩崎隆次郎 元福岡県労働組合評議会事務局長 聞き取り記録

はじめに

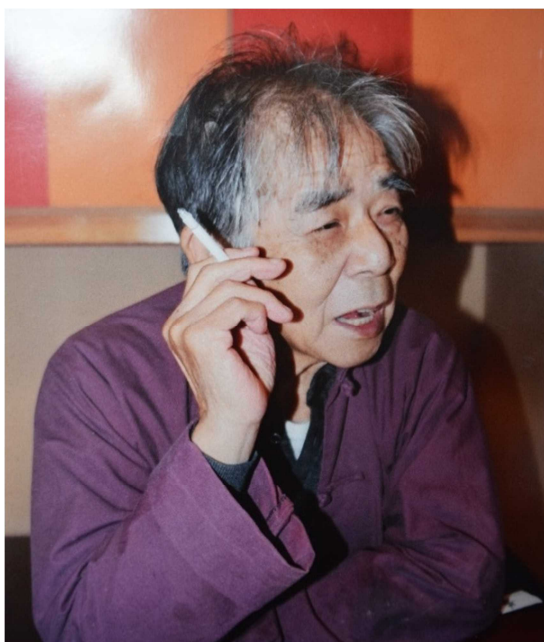
奥田八二日記研究会では、日記の読解とともに、奥田県政を支えた人物への聞き取り調査を行っている。奥田県政から既に 20 年以上が経過しており、奥田や奥田県政を実際に知る人物への聞き取り調査が急務であるからである。

本記録は、奥田八二日記研究会が行った、岩崎隆次郎 元福岡県労働組合評議会（福岡県評）事務局長の聞き取り記録である。岩崎氏は奥田を昭和 58 年の福岡県知事候補として擁立し、知事選の指揮を執った人物であり、その後も福岡県評の事務局長として、福岡県内の労働組合をまとめ、奥田県政を支え続けた。なお、岩崎氏は、奥田の初当選から約 1 年後の昭和 59 年 3 月に『逆転』（読売新聞社）という著作を出版している。この『逆転』には、奥田の擁立から当選までの内実が克明に記述されており、今回の聞き取り記録はこれを基にしている。ただし、『逆転』には、奥田県政の「立役者」となった岩崎氏がいかなるバックグラウンドを持つ人物なのかは記されていない。また、奥田初当選から約 1 年後に出版された『逆転』には、その後、3 期 12 年に及んだ奥田県政を労働組合がどのように支えたのかも記されていない。本記録では、こうした点に重点を置いた聞き取りを行った。こうした聞き取り記録は、福岡県政を研究するうえで、また、戦後の地方政治を研究するうえで貴重なものといえよう。

奥田県政後、福岡県評が連合福岡へ再編されていく過程において、顕在化した対立やその帰結についても聞き取りを行った。そこでは福岡県の労働運動が持っていた主体性とその脆さが語られている。なお、福岡県評については、『福岡県評二十年史』（昭和 51 年）、『福岡県労働運動史』（全 3 巻、昭和 57 年）、『福岡県評三十年史』（昭和 63 年）、『福岡県評三十八年史』（平成 6 年）などが刊行されており、岩崎氏もこれらの著作の執筆等に携わっている。今回、これらを参考にしながら聞き取りを行った。現在では、連合結成前後の福岡県内の労組の動向を実際に知る人が少なくなっており、こうした証言は重要な意味を持つと考える。

内容については、岩崎隆次郎氏ご本人と山本勲元福岡県総評政治部長による校正を得ることができた。記して感謝申し上げたい。

折田悦郎
篠原 新
山田良介



岩崎隆次郎 元福岡県労働組合評議会事務局長 略歴

昭和 7 (1932) 年 3 月 26 日生

昭和 12 (1937) 年 蒲田小学校入学

昭和 13 (1938) 年 湯島小学校に転校

昭和 16 (1941) 年 大宮小学校に転校

昭和 18 (1943) 年 東京都立豊多摩中学校入学

昭和 20 (1945) 年 富山に疎開

昭和 20 (1945) 年 東京都立豊多摩中学に復学

昭和 24 (1949) 年 神奈川県立小田原中学に転校

昭和 25 (1950) 年 東京大学文科Ⅱ類入学

昭和 29 (1954) 年 東京大学文学部国文科卒、NHK に入社、長崎に赴任

昭和 35 (1960) 年 鹿児島に転勤

昭和 38 (1963) 年 福岡に転勤

昭和 39 (1964) 年 日放労福岡分会長・日放労九州支部副委員長

昭和 39 (1964) 年 福岡地区労働組合議長

昭和 46 (1971) 年 福岡県労働組合評議会議長

昭和 50 (1975) 年 福岡県労働組合評議会事務局長

凡 例

1. 本記録は、平成28年1月16日、平成28年2月13日、平成28年3月25日、平成28年5月28日に行った岩崎隆次郎元福岡県労働組合評議会議長への聞き取り記録である。この聞き取りは、篠原新と山田良介が聞き手となり、山本勲元福岡県総評政治部長が陪席した。
2. 文字起こしにあたっては、話し手の雰囲気や損なわないように留意した。このため本記録は口語体に近い形で叙述されている。
3. 小見出しは編者が付けたものである。
4. 段落、改行は適宜行った。
5. 編者による注記・補足は（ ）内に示した。
6. 本記録の編集・校訂は篠原新と山田良介があたった。また、岩崎隆次郎氏と山本勲氏による校正を得た。

第1回（2016年1月16日）

—小学校入学から高校卒業まで—

岩崎隆次郎氏（以下、岩崎と略）：小学校の記録は、いらないでしょ。

篠原新（以下、篠原と略）：後で何でもいただければ、有難いです。

山本勲氏（以下、山本と略）：書類関係で揃えてあるもの、何かありますか。

岩崎：いいえ。ただ、数字を一生懸命考えて。転居したりして、転校してるんですよ。小学校だけで3回ぐらい転校してるから。まず、昭和7年3月26日生まれ。昭和12年、蒲田小学校に入学。

山田良介（以下、山田と略）：お生まれになった場所はどちらですか。

岩崎：京橋区新富町です。生まれてすぐ、蒲田へ家を引っ越したので、入学は蒲田小学校でした。翌年、昭和13年に、本郷区の湯島小学校へ。昭和16年に親父が死んで、杉並の永福町に転居です。大宮小学校です。

山田：お父様は、差し支えなければ、どういうご職業だったのですか。

岩崎：鉄工所をやっていました。

篠原：とりあえず、高校まで話を聞かせてください。

岩崎：昭和18年に都立豊多摩中学へ入学しました。それから、昭和20年に、疎開で富山に移りました。

山田：富山はどのような理由で。学校全体で、ということですか。

岩崎：いいえ。家が疎開しました。

山田：お母様の方の？

岩崎：はい。弟と私の3人で。入ったのは富山中学です。昭和20年に、終戦の後、東京に帰って、豊多摩中学に復学しました。昭和24年に神奈川県立小田原中学へ転校。

篠原：どうして転校したんですか。

岩崎：転居したんです。そして、昭和25年に東大文科Ⅱ類の方へ行きました。

篠原：ちょっとこれまでのことで聞きたいのですが、岩崎先生のお生まれになられたところは、鉄工所を営んでおられたということですか。

岩崎：そうです。

篠原：それは、ずっと鉄工所をやっていたのですか。

岩崎：もともとは、鉄屋でした。おじいさんは、ノルマントン号ですか、明治時代に沈没した船で、人種差別で問題になった。そのサルベージをしてるんですよ。

篠原：その頃から、鉄工所をやっておられたのですか。

岩崎：いいえ。鉄屋です。サルベージだから。くず屋……。当時、家は横浜にありました。

今、横浜には、岩崎山公園という公園が残っていますが、祖父のころに儲け始めたお金で、横浜市に土地を寄付して、そこを公園にしたんです。

篠原：それが岩崎山公園。それで、お父様の頃は、鉄工所をやっておられた？

岩崎：そうです。会社です。

篠原：どんなものを作っていたのですか。

岩崎：あの頃は軍事工場です。

篠原：兵器を作っていたのですか。飛行機とか。

岩崎：そんな大きなものではなく、鉄砲の弾とか。

篠原：ということは、岩崎先生のお父様がおられた頃は、おうちが豊かな方だったのですか。

岩崎：そうですね。かなり豊かでした。だから、本郷の湯島に移った時には、大身の旗本の、大名の下屋敷ぐらいありましたね。

篠原：ご家庭の政治的な思想とかは？

岩崎：ごく普通の家です。

篠原：例えば、戦争に賛成とか、反対とか。

岩崎：賛成ではなかったけど、賛成せざるを得ない状況でした。軍事工場だから。

篠原：岩崎先生自身は、少年時代に政治的な関心はありましたか。

岩崎：全くないです。ごく普通の少国民。

篠原：勉強に関しては、好きな教科とといいますか、文系か理系か。

岩崎：文系ですね。子供の頃、富山に疎開した時は、することがなかったから、家に『日本名著全集』というものがあって、もともと歌舞伎が好きでしたから、江戸文学のものは随分読みました。今でも、読本が残ってますが、黄表紙とか読本とか、あのようなものは、随分読みました。

山田：歌舞伎がお好きということは、それこそ子供の時に。

岩崎：新富町というのは、新富座という菊五郎と初代の吉右衛門の劇団がよく……。芝居小屋がすぐ近くにあって。家から歩いて5分くらいでしたから。

篠原：ということは、江戸文化に……。

岩崎：もともと江戸っ子ですから。

篠原：学校の方で、勉強は良くできた方ですね。

岩崎：普通ですね。小学校の1年生の時には、通信簿は全部、乙でした。甲乙丙丁。乙ばかりでした。

—東京大学に入学—

篠原：でも、先生は東大に進学されるわけですね。それは、かなり勉強ができないといけないわけですが。

岩崎：『名著全集』などを読んできましたから、江戸文学のものは、ずっと読めたんですね。『奥の細道』とか一茶の日記とか、すらすら読んでましたから。

篠原：先生が東大に進学した理由は何ですか。

岩崎：国文に入りたかったから。早稲田と東大と受けて、結局、月謝の安い方を選んだということです。あの頃は、東大の月謝は、月に 300 円くらいでしたから。入学金も 1000 円くらいでしたよ。

篠原：高校から東大に行く時に関しては、それなりに勉強されたと思うんですけど。

岩崎：普通でしたね。

篠原：でも、同級生の中で東大に進まれるのは、そんなにいないですよ。

岩崎：不思議なことに、あの頃は学生が多かったから、一学年 350 人位いたんですよ。

模擬試験なんかがあると、いつでも 20 番から 30 番位でした。

篠原：国文に進むために、東大に行かれたということなのですが、この頃も、まだ政治についての関心は？

岩崎：全くありませんでした。

篠原：例えば、当時の吉田茂とか。

岩崎：東大に入った最初の年に、試験ボイコット闘争というのが全国的にあって、それに参加しました。それは、意識があって参加したのではなくて、東大に入ったら、みんなが試験ボイコットをやっていたので、私も入ったということです。

篠原：東大で在学中に、どのような研究をされていましたか？

岩崎：要するに、歌舞伎に関することばかりやっていました。

山田：ちょっと話を戻させていただいてもいいですか。ご家族の構成を教えてくださいもよろしいですか。

岩崎：親父は昭和 16 年に死んでますから、お袋と 12 歳上の兄と、10 歳上の姉と、3 歳下の弟と私です。

山田：お父様がいつお生まれになったかとか、分かりますか。

岩崎：昭和 16 年に死んだ時に、49 歳でした。

山田：お若いですね。ご病気ですか？

岩崎：心臓麻痺でしたね。

山田：お母様は？

岩崎：76 歳で死にましたけど。

山田：いつお亡くなりになられましたか？

岩崎：あれは、私が月隈に移ってからだから。あなた、あの時、一緒に移ったよね。月隈に家を買った時。

山本：あれは、岩崎さんが大橋におられた時に、向こうに（月隈に）引っ越した時の協力はしましたけども、一緒くらいだったけど、昭和 50 年でしたかね。

岩崎：その辺の記憶が曖昧で。

山田：それなら、結構です。

篠原：それは、また分かったら。

山本：調べたら、分かりますね。(※調査の結果、昭和53年と判明)

山田：お兄様、お姉様、弟様は、今もお元気なのですか。

岩崎：兄と姉は死にました。弟は元気です。

山田：さっき聞き間違ったのかもしれないのですが、昭和20年に東京の豊多摩中学校に戻られて、昭和24年に神奈川県立小田原中学校にということですが、これは中学ですか。

岩崎：はい。中学です。あの頃、新制中学になってましたけどね。切り替わった直後です。

山田：旧制高等学校は行かれずに。

岩崎：教養部から入っています。

山田：そして、そのまま東大文科に、ということですね。わかりました。

岩崎：私は、江戸文学なんか随分やってたから、あの時の試験の成績は、国語は、ほぼ満点に近かったもんね。

篠原：先生は、やはり国文が好きで、古典を読まれていた。

岩崎：だから、あんまり試験勉強するよりも、好きなように本を読んできましたから、かえってそれが良かったんでしょうね。

篠原：東大でも歌舞伎等について勉強された。

岩崎：あの時は、ゼミが守随憲治さんという人でした。守随さんという人は、浄瑠璃などを良く講義された方で、源氏物語の作者が二人いるということ、あの頃発表された方です。

篠原：そのほか、面白いと思った先生はおられますか。

岩崎：守随さんだけでしたね。教養部に入った時に、市古貞次さんという方がいました。源氏物語の宇治十帖を教科書に使われて、あの時、面白いと思いました。

篠原：先生は、東大にいる時に、サークルは？

岩崎：サークルは、演劇のサークルでした。東大の合同演劇勉強会、「東大合演」といって、かなり有名でした。当時、一緒だったのが、俳優で死んだ渡辺文雄。それから、今でも悪役とかやっている田口計は一緒でした。

篠原：劇団でどんなことをやっていたのですか？

岩崎：役者です。それから、作者には、福田善之という脚本家もいました。

篠原：それは、創作劇だったのですか？

岩崎：そうですね。

篠原：その頃の東大の状況について、お聞きしたいんですけども。

岩崎：当時は、まだ民青が優勢で、学生運動というのは、ほぼ民青主導でした。

山田：そこに関わったりはされましたか？

岩崎：全然、関係なかったです。

山田：その時の政治的な立場は、ご自身で振り返ってどう思われますか。

岩崎：ごく普通のノンポリですね。

山田：政治に、そこまで関心はなかったということですか。

岩崎：なかったです。

篠原：そうすると、東大では、特に政治に関しては、関心はなかったということですか。

岩崎：なかったです。

篠原：それで、歌舞伎や劇団、サークルをずっとやっていた。

岩崎：はい。それで、卒論を一生懸命書いてましたから。

篠原：どんな卒論だったのですか？

岩崎：「歌舞伎史における演技的考察」。

篠原：どんな内容なのですか？

岩崎：私が好きだったのが、鶴屋南北でした。江戸の歌舞伎というのは、俳優の人気と技術で成り立っている。だから、そういうものがずっと進化していくと、外連（けれん）ものに自然に演技が向かっていくし、そういう中で、怪談、狂言なんかが出てくるわけよね。その辺の演技の変遷を中心に考えて書きました。

篠原：先生からの評価はどうでしたか？

岩崎：悪くなかったですね。

篠原：その後、研究を続けようという気持ちには、ならなかったですか。

岩崎：食べていけないといけなから。就職しなければいけなかった。

山田：また、話が戻りますが、お父様が亡くなられて、もともとご実家は裕福だったと思いますが、そのあと、経済的には、どうだったのですか。

岩崎：中の上くらいの生活をしていました。

山田：お兄様とかが、家計を支えられていたのですか？

岩崎：兄は戦争に行っていましたから。

山田：差し障りがない範囲で結構なのですが、お父様が亡くなられて、鉄工所の経営は？

岩崎：全部手を引いた。

山田：そのあと、収入はどのように？

岩崎：遺産で食べていたようなもの。

山田：財産で食べていらっしまった。それで、お兄様は軍隊に行かれて、岩崎様は大学に入られる。

岩崎：だから、お袋が図書館の食堂の経営とかやっていた。

山田：図書館で？ どの図書館ですか？

岩崎：駿河台図書館。

山田：お母様は、そういう形で、お仕事はしてらっしまったということですか？

岩崎：はい。しないと食べていけなかつた。私も大学に入って、すぐにアルバイトで、学校の警備員をしました。あの頃、鉄鋼は現金になったでしょ。マンホールの蓋がよく

盗まれたので、学校に警備員みたいなのを置いていた。

篠原：金属製品を守るために？

岩崎：はい。夜警です。夕方行って、二晩泊まって1日休み。昼間は学校に行けた。私の職場は深川でしたから、本郷まで都電で1本だったんですよ。朝、8時半になると大学へ行って、夕方戻ってアルバイトしていました。

—NHKへの就職と労働組合との出会い—

岩崎：あの時は、朝日とNHKを受けたんですよ。

山田：最初から、マスコミ志望？

岩崎：そうそう。国文科じゃ、他にいくところがないじゃない？

篠原：出版社とかはないですか？

岩崎：考えませんでした。

山田：朝日というのは、朝日新聞ですか？

岩崎：そうです。NHKに受かったので、NHKへ。

山田：朝日は駄目だったのですか？

岩崎：駄目だった。あと、学校の先生の実習を受けて、中学校で評判が良くて、うちの学校にこないかって言われた。NHKに受かったので、お袋に相談したら「お前、寄らば大樹の陰だよ」と言われて、NHKに行った。

山田：当時、NHKと学校の教員は、給料的には、どっちが高かったのですか？

岩崎：まだ、NHKの方が少し良かったですね。私が入った時の初任給は9,170円。

山田：大学を卒業されたのが、昭和29年。そのまま、ストレートで？

岩崎：はい。そうです。そうでないと、食べて行かれなかった。昭和27、28、29年は就職難で大変だった。

篠原：NHKに就職されたということですが、職種は？

岩崎：最初からアナウンサーでした。

篠原：どうしてアナウンサーを志望されたんでしょうか。

岩崎：番組のほうをやりたかったんだけど、点数が足りなかったらしくて、アナウンサーなら合格だったから入った。

篠原：まず、NHKに入社されて、最初の赴任地が？

岩崎：長崎でした。それが昭和29年。そして、昭和35年に鹿児島に移ります。

篠原：その頃、先生は長崎でも鹿児島でもアナウンサーとしてのお仕事ですか？

岩崎：はい、ずっとそうです。

篠原：どんな番組を担当されていたのですか？

岩崎：街頭録音とか、インタビューものが多かったですね。

篠原：それは、ラジオですか？

岩崎：当然、ラジオです。まだラジオしかなかったです。

篠原：街頭録音は、どんな質問を？

岩崎：たくさんの人を置いて意見を聞くという、あの頃、流行りの取材方法でした。

篠原：質問自体は、何でも？

岩崎：テーマがあるから、テーマに沿って、聞いていくわけですよ。

篠原：それを、ラジオで流すということですね。長崎時代でも鹿児島時代でもいいのですが、何か印象的な出来事がありましたか？

岩崎：佐世保のボタ山崩れというのがありました。大野炭鉱。

山田：それは、いつ頃だったか覚えていらっしゃいますか？

岩崎：あれは、昭和 30 年じゃなかったかな。

篠原：入社した翌年ですか？

岩崎：はい。

篠原：そういったことがあったけれども、まだ、政治的な関心は特に？

岩崎：なかったです。政治的な関心は、私は全くノンポリだった。未だにこんな本を読んでいるわけだから。

山田：黙阿弥の明治維新。これは歌舞伎ですか？

岩崎：歌舞伎です。河竹黙阿弥。その頃、中心だった小団次っていう有名な役者がいるんですよ。その人との関係を描いた本。

山田：では、ずっと歌舞伎等の江戸文学、文芸は、ライフワークみたいな形ですよ。それは、ずっと一貫してるわけですか？

岩崎：一貫しています。

篠原：長崎から鹿児島へ転勤されることになるんですけども、どうして転勤になったのですか？

岩崎：NHK は転勤が、つきものだった。

山田：大体、一般的に、何年くらいなんですか。

岩崎：4 年、5 年。長くて 6 年。

篠原：それで、鹿児島に来られて、そこでも街頭録音のラジオを担当されていたのですか？

岩崎：そうですね。社会番組系が多かったですね。あとは、農業番組。当然、田舎だから。漁業番組も多かったですね。

篠原：鹿児島におられた時に印象に残っていることはありますか？

岩崎：私は、奄美大島の民謡に非常に惹かれて、NHK の放送研究所というのがあって、そこに、私の書いた『奄美の歌』という本が残っています。奄美の民謡の文句を、そのまま音にして書き起こして、それを、読んですぐ分かるように、漢字交じりで書き直した。

篠原：要は、あれは現地の言葉ですから、分からない。それで、現代語訳をつけるわけですね。なるほど。

山田：それは、奄美まで行かれて録音されたのですか？

岩崎：そうです。

山田：それはNHKの仕事というよりは、ご本人の関心？

岩崎：いいえ。NHKの仕事でやります。自分では行けない。奄美大島まで行くには、かなり旅費もかかるしね。1週間や10日ないと、そんなに収集できませんでしたから。

篠原：先生は、長崎や鹿児島でのアナウンサーとしての仕事は楽しかったですか？

岩崎：結構、楽しくやってたね。

篠原：高い評価は得られていましたか？

岩崎：さ、どうだろうか。私はそんなに声がいい方じゃなかったから。梶原四郎というアナウンサーがいるでしょ？

篠原：梶原四郎？ どこにいるのですか？ アナウンサー？ 鹿児島に？

岩崎：その頃、新人で来たんですよ。この人の声を聞いた時に、とてもかなわないなと思っただけ。すごい、いい声でした。

山田：当時はラジオですから、声だけですもんね。

岩崎：声だけです。

篠原：先生のラジオの録音を聴いてみたいですね。

岩崎：私も悪くはなかったけど、今でも声は悪くはない。

山田：東京から九州というのは、当然、ご本人の希望ではないんですよ。都会から田舎に来て、どう思われましたか？

岩崎：嫌だったよね。

山田：やっぱり行きたくなかったですか。

岩崎：第一、歌舞伎が観られなくなるからね。

山田：当時は無理ですよ。

岩崎：9,170円で、当時は寮に入ってたもんね。食費と寮費で7,000円くらいかかったから、ギリギリの暮らしでした。

山田：お正月に東京の方に帰るといのは？

岩崎：まず無理でした。

山田：では、お母様が東京にいらっしゃるの、手紙とかですか？

岩崎：手紙もしましたが、ほとんど音信不通みたいな感じ……。

篠原：先生はこの時結婚されてますよね？

岩崎：そうですね。昭和30年でした。

山田：結構、早いんですね。

岩崎：だって、することないですから。

篠原：奥様と知り会われたのは大学ですか？

岩崎：大学です。

篠原：ということは、奥様も東大？

岩崎：いいえ。都立三田高女。芝居のグループで入ってきて、それで仲良くなって結婚したという感じです。

篠原：奥様を長崎に呼び寄せたという感じですか。

岩崎：向こうがきて、長崎で結婚しました。

山田：奥様のお名前は？

岩崎：まさこといいます。「正子」です。

篠原：ということは、2、3歳下ですか？

岩崎：あの人は昭和10年だから。3つ下だね。

山田：それは、大学の時に、最初から結婚を意識して、就職したから結婚されたということですか？

岩崎：そうですね。

篠原：奥様も東京の方ですか？

岩崎：生まれは秋田。育ったのが東京。

篠原：奥様も急に長崎という田舎に来るのは嫌でしょうね。嫌だとおっしゃられませんでしたか？

岩崎：いいえ。特になかった。

山田：奥様は専業主婦をされていたのですか？

岩崎：そうです。

山田：結婚されてからは寮ではなくて？

岩崎：県立の団地に住みました。6畳一間の。長崎市の住吉という地区があって、そこに県営団地の集合体があって、その団地に住みました。

篠原：先生はその後、鹿児島に向かわれますが、NHKの役職は上がるのですか？

岩崎：上がりました。初めは3級で入りますが、1級職員に上がりました。

篠原：3級、1級というのは、給料の形態？

岩崎：給料ですね。

篠原：鹿児島は、長崎とお仕事の内容は変わらない？

岩崎：変わらないです。ただ、鹿児島は1級になったので、経営の方も。中間管理職みたいな感じ。課長まではいかないけど。係長に毛が生えたくらいの位置になりました。

篠原：当時の役職の正確な名前というのはないのですか？

岩崎：アナウンサー。

山田：アナウンサーの中の1級職員ということですか？ アナウンス部の中間管理職ということですか？

岩崎：そうですね。頭でしたね。

山田：今までの中で、まだ、労働組合との関わりというのは？

岩崎：ないです。いや、長崎にいた時に、半年ぐらい人がいなくて、副委員長をさせられたことはあったけど。

篠原：労組のですよね。

山田：NHK自身は、当時は組合員というのは、全員、入っているわけではなかった？

岩崎：全員入ってます。クローズドショップだから。

山田：だから、全員が入ってるんですね。ただ、そこで、役職をやるかどうか。長崎のときは、人がいなかったから、副委員長を？

岩崎：半年ぐらいね。

篠原：鹿児島では？

岩崎：鹿児島では全然やってないです。鹿児島のころは、ちょうど三池闘争、60年安保の時代だけど、あのころは全く関係なかったです。

山田：当時、安保、それから三池闘争と、ありましたけど。

岩崎：鹿児島で、横目で見えていました。

山田：特に、ご本人は、そこまで関心がない？

岩崎：関心がなかったですね。

篠原：私は鹿児島出身なんですけど、鹿児島は、かなり政治的に保守的ですよね。そういったことも関係なかったですか。

岩崎：関係なかったです。選挙なんか関係してなかった。

—福岡局への異動と地区労事務局長就任—

篠原：その後、岩崎先生はNHKの福岡支局にこられるのですが、それは昭和……。

岩崎：昭和36年です。ごめんなさい。昭和38年です。

篠原：これは出世ルートなのですか？

岩崎：そうですね。福岡は中央局ですからね。

篠原：そうですね。先生のお仕事はやはりアナウンサーで？

岩崎：アナウンサーです。

篠原：どういった番組を担当されていたのですか？

岩崎：やっぱり社会番組系が多かったですね。歴史物なども、ずいぶんやりました。

篠原：当時も、まだラジオですか？

岩崎：ラジオです。最後の方では、テレビが始まりましたけどね。

篠原：先生は、この福岡の時に、労働運動に取り組むことになるのですか？

岩崎：取り組むというか、否応なく、そうなった。

篠原：その経緯を詳しく聞かせてもらえませんか。

岩崎：分会長になったんですよ。

篠原：何の分会長ですか？

岩崎：日放労。

篠原：日本放送労働組合ですね。

岩崎：九州支部福岡分会。その分会長になったわけです。

山田：それは、どういう経緯で？

岩崎：いなかったから。「お前、長崎でやってたじゃないか」と言われて、押し付けられた感じだった。

篠原：それは、どなたから言われたのですか？

岩崎：何ということはなく。

山田：当時、まだ30代ですよ？

岩崎：そうです。

山田：30代前半で。それは若い方なのですか？ 分会長を30代でやるというのは。

岩崎：周りを見たら……あの頃の組合なんて。

山田：当時、組合員というのは、福岡の支局で、人数はどれくらいですか？

岩崎：放送分会が、まだ50人～60人の頃だな。

山田：福岡分会の放送分会？

岩崎：そうですね。技術分会、放送分会、事務系の3つに分かれていた。

山田：もう一回確認します。日放労の九州支部があって、その中に福岡分会というものがあって、その分会の中に。

岩崎：放送系と技術系と事務系と3つあるわけです。

山田：今、おっしゃってた放送系が50～60人なのですか？

岩崎：そんなもんでした。局全体で120人ぐらいしかいなかった。

篠原：この福岡分会は、ほぼNHKですか？

山本：オールNHKです。

篠原：他の民放は？

山本：ほかの民放は別です。

岩崎：クローズドショップだから。企業内組合ですよ。

山田：ということは日放労イコールNHKの労働組合であって、各支部、それから局、分会。職によって分かれていたということですね？

岩崎：はい。

山田：50名程度で回り持ちだから、長崎で、そういう経験があるからやれと言われて。当時、分会長というのは、任期があったのですか？

岩崎：2年ぐらいでしたね。いや、1年か。

篠原：これは、どんなお仕事になるのですか？

岩崎：なんていったらいいのかな。普通の分会長だな。

山田：当時は、今と比べると労働運動が盛んでしょうから、例えばNHKの職員でストライ

キを打つとか、そういったことはありましたか？

岩崎：それは、もうちょっと後になるね。その頃は、まだ、あんまりストライキとかなかった頃ですよ。

山田：労使関係の交渉というのは？

岩崎：もちろんありました。

山田：交渉はやるけれども、ストライキはなかった？

岩崎：なかったです。

山田：当時は何を巡って、問題になっていたのですか？

岩崎：一番、問題だったのは、36条協定。要するに、勤務条件ですよ。それから、まだ当時、NHKは発展時代だったから、仕事が増えるにつれて、足りないものがたくさん増えてくるわけです。だから、職場の不満を取り上げるということが、かなり盛んになった時代です。

山田：先ほど、任期が大体1年くらいということでしたが、回り持ちだったら、1年やったら他の人に、ってことになるんでしょうけど。

岩崎：技術分会や事務の方の分会の委員長さんたちが非常に気に入ってくれて、放送の中でも、選挙の時はいつも、ほぼ100%の支持率をとってたから、3~4年やりました。

山田：それは、長い方なのですか？

岩崎：長い。どんどん転勤するからね。

篠原：岩崎先生は、こうした労働組合のお仕事は好きでしたか？

岩崎：特に好きというわけではない。

山田：その後、ずっと福岡支局にいらっしゃるんですよね？

岩崎：それから、地区労、福岡地区労働組合協議会の役員になって。

篠原：その地区労でのお仕事というのは、どういう仕事なのですか？

岩崎：地区労で、議長でした。

山田：地区労で議長になられた経緯は？

岩崎：分会長が、どうしても出てくれないといけないということで、会議に出た時に、地区労がもめたんですよ。そこで、議事をまとめる役を私がしたら、それが当時、副議長だった、後に参議院議員になった渡辺四郎、同じく副議長の大穂克樹っていう市教組の委員長、この二人が私になってくれと、引き抜かれた形になった。

山田：その、揉めてたというのは、どういうことで、もめていたのですか？ 地区労は？

岩崎：会計に不明瞭なところがあるということで。

山田：当時、地区労と政党との関係は？

岩崎：社会党系です。一党支持だから。

篠原：岩崎先生は、社会党にはどういったスタンスでおられたのですか？

岩崎：福岡地区労の議長になってから、あのころ、社会党が盛んだったから、社会党に入

った。

山田：入党されたということですか？

岩崎：はい。議長になったら社会党に入ってもらわなきゃ困るぜって言われた。

山田：社会党に入ることに對する抵抗はなかったですか？

岩崎：それは別にありませんでした。

山田：もともとノンポリであって、特に自民党支持でもなく？

岩崎：自民党支持ではなかったです。自民党は好きじゃなかったから。

山田：自民党に対しては、あまり好意的ではなかったということですか？

岩崎：共産党もあまり好きじゃなかった。そういう人間が、ものすごく多かったからね。

自民党でも共産党でもないという人間が、社会党に行ったんだよね。

篠原：今、おっしゃられたのは、いつくらいから、そういう気持ちだったのですか？

岩崎：共産党が嫌いだったのは、民青との付き合いが嫌だったから。東大のころから。

山田：民青が嫌というのは、どういう理由で？

岩崎：全部、党の言うとおりであったから。

篠原：民主集中制みたいなところですね。同時に、自民党もあまり好きじゃなかった？

岩崎：自民党は、絶対嫌よね。

篠原：どういう理由からですか。

岩崎：何も変わらないから。

篠原：どういう点からですか？

岩崎：良くなるということがなかった。自民党が、ずっと続いていても。今でもそうだけ
どね。私は、今でも自民党と公明党は嫌いですよ。あの 2 つがいる間は、世の中、何に
も変わらないと思ってるから。

篠原：すみません。ちょっと違うかもしれないですけども、当時、自民党が続いていた
わけですよ。経済的な発展は、大きくあったと思うのですが。

岩崎：でも、それが国民の生活を良くしたかという、何も変わってない。

山田：1963年だから、まだ、高度経済成長が始まった段階ですよ。

岩崎：始まったばかりだね。高度成長は、昭和 40 年すぎてだからね。

山田：当時、自民党だと変わらないということであれば、どうすれば世の中がよくなると
思われましたか？

岩崎：主張としては、社会党が一番好きだったね。少なくとも戦争は絶対反対だったから。

篠原：つまり、社会党の非武装中立政策。

岩崎：そうそうそう。非常に共感していました。

山田：戦争が反対となれば、世代で言えば少国民で、疎開経験。戦争体験で記憶に残って
いることはありますか？

岩崎：ありましたよ。東京の新橋演舞場で、6 代目菊五郎が劇団をやっていたころに、最後

の公演が昭和19年の秋だった。そのころ、だんだん歌舞伎は不要なものとされて、あんまり流行らなくなった時代よね。だけど、その時に演舞場で菊五郎劇団が公演をして、船弁慶をしていて、これが見たくて仕方がなかった。だけど、お金もなかったし、空襲もあって、本当に嫌だった。

篠原：戦争のために、好きな歌舞伎が見られなかった。

岩崎：お腹も空いていた。昭和21年なんか、ほんと食べるものがなかった。

篠原：また、ちょっと福岡の時の労働組合について、お聞きしたいのですが、社会党はソビエトとか中国との関係を重視していましたが、先生の外国観というのはどうですか。

岩崎：ロシアは、招待で行きました。

篠原：どのような感じでしたか？

岩崎：それは、総評からの割り当てで、日放労の中で指名されて行きました。

山田：それは、いつ行かれましたか？

岩崎：昭和33年ぐらいじゃなかったかな。

山田：行かれた場所は、ソ連のどこですか？

岩崎：ドネツク。ドネツクと福岡は友好都市だったから。

山田：ドネツクは炭鉱ですよ。

岩崎：九州だから炭鉱で。

篠原：先生は、ソ連のドネツクに行かれて、どういう感想をお持ちになりましたか？

岩崎：やっぱりすごいなと思ったよ。

篠原：発展していると？

岩崎：うん。それから、幼稚園の子供が、ものすごく可愛かったのが印象に残っている。

天使というのは、こういう子供のことをいうのだと思った。ものすごくきれい。小学校2、3年ぐらいまでは。そのあとは、どんどん太って……。それから、バスの運転手さんが女の子だったのがびっくりした。

篠原：先生はどちらかというと、アメリカとかよりも、ソ連の方がよかったと考えていた？

岩崎：良かった。やっぱり、安保は反対だったからね。

篠原：旧安保条約？

岩崎：はい。

篠原：新安保条約に変わっていきますが。

岩崎：旧安保のころから、安保条約そのものが、あんまり好きじゃなかった。戦争の記憶が、まだしっかりしてましたから。あなたは、知らないだろうけど、私にとっては、戦争は本当に嫌なものだった。未来を全部奪うものだという印象だった。

篠原：政治的な関心というよりは、戦争反対、反戦の気持ちが強かったわけですね。

岩崎：そうですね。

篠原：それで、安保とかに対して、批判的だった？

岩崎：非武装中立が絶対だと思っていた。

篠原：資本主義と社会主義の対立については？

岩崎：あまり関心がありませんでした。当時、アメリカが嫌いなら、ソビエトの社会主義を支持するしかなかった。エンゲルスの『猿の人間への進化における労働の役割』は、一生懸命読んだ。それから、『国家の起源』も読みました。『資本論』も読み出したけど、難しく途中でやめました。

山田：その組合の勉強会というのは、なかったのですか？

岩崎：ほとんどありませんでした。職場集会はありました。

山田：それは、どのくらいの頻度で？

岩崎：月に2回ぐらいは、ありました。

山田：集まって、どのようなことをやるのですか？

岩崎：賃金要求を決めたり、職場改善要求を出したり。

山田：ということは、基本的には、労働条件の改善というものが。

岩崎：それだけです。

山田：そこから、さらに政治的な運動へということとは？

岩崎：なかったです。

篠原：例えば、選挙の時とかに、社会党候補に入れてくれというようなことは？

岩崎：あの頃、委員長が上田哲だったからね。日放労全体が、社会党1党支持になったわけ。それで、分会長の役割として、選挙の応援に行くということで、上田哲が参議院で全国に出た頃だったので、選挙の応援・・・分会の役員は、みんな選挙の勉強をしなければならぬということがあった。城南区の末永さんという教組出身の市議員がいたけど、その人の応援に行ったりはしました。

篠原：そうした選挙運動に駆り出されることについては、岩崎先生は特に感想は？

岩崎：特になかったです。

山田：話を進めさせていただきますが、地区労の協議会の議長になられたということですよ。

岩崎：2期だから4年やりました。それから、県評の事務局長をやりました。

篠原：その経緯は？

岩崎：要するに、地区労議長の際に、評判が良かったみたいで、県評が出来る時に、「県評に入ってくれ。議長になってくれ」と言われて、議長になりました。

山田：それがいつですか？

岩崎：忘れた。

篠原：昭和50年から事務局長ということですよ。

岩崎：その4年前だから。

篠原：ということは、昭和46年ですね。先生は、労働組合を順調に登っていかれています

が。

岩崎：みんな、人に言われてなった感じ。

篠原：先生は会議をまとめるのが上手かったですか？

岩崎：ひとつは、運動方針を書くと、結構、筆が立つ方だったから。

篠原：なるほど。先生は文章が。

岩崎：俺が松田さんを嫌いだったのは、文章が本当に下手だったから。

山田：どなたですか？ まつ？

岩崎：事務局次長。

山本：それは、また別の話。

篠原：先生は、文章がうまくてそうした能力を評価されていたということですね。

岩崎：そうですね。それと、演説も上手だったよ

山本：今まで、地公労とか、自治労とか、拡声器でわーっとやっていた。岩崎さんは、民間で育ってるから、みんなに訴える力がある。独特の岩崎さん流の味のあるお話が。

篠原：結構、福岡というのは荒いのですか。

山本：それはそうですよ。自治労、何万人でしょ。そういう中で日放労は120人。それを産別が選挙でやって、岩崎さんになるということは、やっぱり岩崎さんは、何かもってらっしゃったんでしょうね。

岩崎：県評になって、ずっと選挙だったけど、いつも私は強かったもんね。

山田：県評では、自治労が中心的だったのですか？

岩崎：それは御三家です。国労、自治労、日教組。

篠原：でも、岩崎先生は、国労でも、自治労でも、日教組でもない。日放労だけど、選挙すると、岩崎先生が勝つと。それは、岩崎先生の新鮮な感覚といえますか。

岩崎：労働組合らしくない感覚と言ったほうがいいかもしれないね。

山本：やっぱり、みんな新鮮に映ったんでしょうね。

岩崎：新鮮な感じがしたんだろうね。

篠原：経歴から、そうだと思いますね。

山本：岩崎さんが書いた運動方針など見て頂いたらわかると思うけど、今まで書いとった世界の情勢など、読んでみて分かりやすくなった。岩崎さん流というか、また違う文化的な部分もある。勉強されていたということもあると思います。文章そのものが柔らかくて。

岩崎：私は、ほとんど話し言葉で文章を書く癖がついている。アナウンサーだから。それが、やっぱり良かったんでしょうね。読みやすかったんでしょう。

篠原：一方では、苦勞されたことも多かったのでは？

岩崎：それは小単産だから。小単産以下だな。中小零細企業。

篠原：一番苦勞されたことは何ですか？

岩崎：大単産の横暴です。

山田：先ほど言われた御三家ですね。横暴というのは、どういうのがありますか？

岩崎：難しいね。あの頃、知事が亀井さんで、自治労が、どうしてもストライキやると言
って、聞かない、県職労が。私はやめた方がいいと思った。それで、亀井のところに乗
り込んで、「ストライキをやめさせますから、処分はしないでくれ」という話をした。そ
れで OK になった。それで、ストライキをやめてくれと言ったら、後で自治労から言わ
れたのは、「今回は仕方がないけど、二度としないでくれ」と言われた。

篠原：ストライキを止めるような真似はしないでくれということですか？

岩崎：いや、要するに「話をつけることをしないでくれ」と。断固断固だったわけよ。

篠原：勝手に話をつけるのはやめてくれと。

岩崎：やめてくれというけれども、ほっとしていた。

篠原：岩崎先生は、なぜストライキをやめた方がいいと考えたのですか？

岩崎：処分が増えるのが見えてたから。処分が出れば、第一、経済的に問題になる。組合
は分裂するし。だから、それはない方がいいと思ったわけ。

篠原：当時も、自民党というか保守的なのが知事であったり、内閣総理大臣も自民党でし
たが、岩崎先生としては社会党政権というものは？

岩崎：できれば、面白いと思っていた。

山田：県評で活動されていた時期は、亀井県政？

岩崎：亀井県政時代です。一番、地公労がいじめられていた頃です。

篠原：亀井県政で一番腹が立ったことというのは、どういうことがありますか？

岩崎：処分なくめだったこと。ストライキしたぐらいで、すぐ処分する。私は、ストライ
キが違法だとは思わなかった。民間は当たり前じゃないですか。

山田：NHK の仕事も当然してらっしゃるわけですね。そこで、県評などの労働運動が、
だんだん忙しくなるわけじゃないですか。どうだったのですか？

岩崎：仕事は仕事をして、休憩時間になったら、すっ飛んでいくわけ。あの頃、市役所前
集会だった。そうすると、昼のニュースを読んで、ぱっと飛ぶわけ。3 分ぐらいで行く。
そこで、演説が終わったら、さっと戻るわけよ。そして、そのままニュースを読んだり
してたからね。

山田：休み時間にするとすることは厳格に守っていたわけですか？

岩崎：それはそうですよ。

山田：それは、NHK の中でも、勤務時間にやると処分される？

岩崎：もちろん。

篠原：NHK の中で、そうした労働運動をやっていると、例えば上司から何か言われるとい
うことは？

岩崎：それはなかった。

山田：今、お話を伺っていると、最初は労働運動に対して、そこまで熱心でなかったのが、だんだん、はまっているような。

岩崎：はまっちゃうわけよ。抜けられないんだから。一度なったら、勝手にやめるわけにはいかないの。

山田：「私は、もう十分やりましたから」と断ることもできたんでしょうけれども、そうならないということは、ご本人がやっぱりだんだん。

岩崎：責任感があったからね。そう簡単にやめるわけにはいかなかったです。

篠原：同時に、岩崎先生もやりがいを感じていたということはあるですか？

岩崎：やりがいは、あまりなかったけど、責任感でやっていた。

山田：当時、労働組合運動をしてらっしゃって、組合というのは、どういうものであるべきだと思いますか？

岩崎：企業別組合ではないほうがいいと思った。

山田：産業別で？

岩崎：企業内組合というのは、あまりいいことではないと思っていた。

山田：どういう点でよくないと思われましたか？

岩崎：自分たちのことだけしか考えてない。

山田：「企業にとっていいこと」ということですね。県評でやってらっしゃった中で、特にここは力を入れたというようなことはありますか？

岩崎：最低賃金と、県下全体が1本になるほうがいいと思ってから、地区労働には、随分援助しました。地区労に補助金出すようになったのは、私の頃からです。

山本：30箇所くらいありましたかね。

岩崎：32。

山田：地区労がですか？ 32というと、どのくらいの地理的な単位なのですか？ 福岡市の中にもいくつか。

岩崎：福岡市は1つ。東部地区労のほうが、あったかもね。粕屋とか。

山田：粕屋にもあるんですね。

岩崎：宗像にあるとかね。もちろん、筑紫郡が1つ。大牟田に1つ。久留米に1つ。北九州が1つというようにありました。

山田：地区労も、基本的には社会党系ですか？

岩崎：そればかりだよ。あの頃はね。

山田：共産党系は？

岩崎：共産党系はあったけど、勢力が小さかった。

山田：地区労の中での勢力が小さいということですか？

岩崎：全体の労働運動の中での共産党の勢力が小さかったよね。六全協、共産党の第六回全国協議会の時に、自己批判するんだよね。日本共産党の一党の引き回しだったことに

ついて。あの頃から、総評も社会党一本主義になったし、地区労、県評も一本主義のところが多くなった。

篠原：共産党から離れていったということですね。

岩崎：私は共産党系を差別するという事はなかった。

篠原：批判的ではあったけれども、差別はしてなかったということですね。

岩崎：だから、共産党は例の奥田選挙の統一問題の時に、私の意見に乗ってくれたわけ。

—奥田八二先生との邂逅—

篠原：今、奥田先生の名前が出ましたが、奥田先生と出会った最初のきっかけは？

岩崎：あの頃、奥田さんはものすごく各労働組合の講師をして、招かれることが多かった。

地区労も、そういう意味では世話になってたから。

篠原：具体的に何年ぐらいに初めて出会っていたか、わかりますか？

岩崎：地区労議長になってからですよ。だから、昭和33年ぐらいじゃなかったかな。

篠原：最初、奥田先生と出会った時、奥田先生について、どのような印象を持たれましたか？

岩崎：座談のうまい人だなと思った。ただ、演説がものすごく下手だったね。退屈。眠くなる。

篠原：座談はうまいけれども、演説は下手。

岩崎：下手でしたね。

山田：こういうところでの話はいいけれども、みんなの前で喋るとなると。

岩崎：口ごもるし、滑らかじゃないし、眠くなることが多かったです。

篠原：話が学者っぽい話で？

岩崎：そうですね。

篠原：先生は他にも多分、たくさんの学者の方とお知り合いだったと思うのですが、その先生の中で、奥田先生というのはどういう特徴がありましたか？

岩崎：あの頃、具島先生などは、共産党系と見られていた。

山本：あの頃は、まだ長崎だったのかな？

篠原：長崎大学学長をされてた時ですか。具島先生は、話ほうまかったですか？

岩崎：具島先生は、浪花節だった。ジェスチャーも大きかったし。具島先生の演説は面白かったですよ。

山田：お体も大きいから、結構、見て映える感じですよ。

篠原：他に、どういった学者の方とお知り合いになっておられましたか？

岩崎：あとは、衣笠さん。それから、法学部の菊池高志さん。あの頃、私は地労委の委員をやっていたから。菊池さんの前の九大の法学部長、誰だったかな。

篠原：ちょっと、今、わからないですね。

- 山田：菊池高志さんというのは、2代に渡ってやっていますけど、お子さんの方？
- 岩崎：お子さんの方。
- 山田：菊池先生の学部長の前ですか？
- 岩崎：そうそう。いやいや菊池先生のお父さんの後かな。
- 篠原：ちょっと調べておきます。(※菊池勇夫氏(父)の後の学部長は舟橋諄一氏) こうした先生と知り合いになられたということですね。あと、向坂先生については？
- 岩崎：私は反対の方だったからね。太田派だったから。
- 篠原：向坂先生と会ったことはありますか？
- 岩崎：あります。荒牧さんと……。
- 山田：荒牧さんというのは、どういう方？
- 岩崎：九大の先生だった。(※荒牧正憲氏)
- 山本：斎藤さんもでしょ？
- 岩崎：斎藤文男さんは、NHKの頃の出演者で知り合った。
- 山田：斎藤文男さんも向坂系？
- 岩崎：それは関係ない。
- 篠原：奥田先生も、向坂先生との関係がありますよね？
- 岩崎：もともと、一緒だったから。
- 山田：私が不勉強なのですが、向坂派と太田派というように別れていく。社会主義協会が分かれていく。それは、どういう理由で分かれたのですか？
- 岩崎：三池闘争の指導の問題だった。
- 山田：1960年の三池闘争の指導を巡って。
- 岩崎：あの後で分かれるわけだから。
- 篠原：向坂先生は、三池闘争を肯定的に評価するんですけど、太田薫のほうは……。
- 岩崎：向坂派は断固、断固だったから。太田派はもう少し柔軟であっていいのではないかと。
- 山田：福岡の場合というのは、ある意味、どっちが？
- 岩崎：太田派が強かった。
- 山田：イメージだと、向坂派かなと思ったのですが。
- 岩崎：そうではない。向坂派はむしろ、九州では、福岡以外の田舎の方で強かったよね。
- 山本：長崎なんか強かったですね。
- 山田：大牟田はどうだったのですか？
- 岩崎：あそこは、向坂派と太田派と両方あった。
- 篠原：岩崎先生は、太田派だった？
- 岩崎：太田派だったね。
- 篠原：太田派といっても、いわゆる社会党の左派ですよ。それは、どうして社会党右派

ではなかったのですか？

岩崎：そういう人たちとの付き合いが多かったから。

篠原：向坂先生とかの方に批判的だった理由というのは？

岩崎：私は、企業内組合が、あんまりそれを超えたら、分裂を起こしたりして、決して労働者の得にはならないと思ってたから。

篠原：だから、向坂派ではなかったということですね。

山本：あのころ、釜焚き論ってなかったですか？ 向坂さんのまわりを釜焚きというか、あの人は学者ですからね。労働者をたくさん連れてこいと。釜にどんどん入れて、教育して、どんどん社会主義者を作ると。釜焚き論って有名だったんですよ。

篠原：そんな労働者も単純じゃないですよ。

山本：灰原さんあたり……。小島恒久さんが、そういう傾向でされてましたよね。……何回か聞いたことあるけど。

山田：灰原さんというのは、三池の？

岩崎：三池労組書記長の灰原さん。

篠原：小島恒久さんは、まさに向坂先生のお弟子さんみたいな感じでしたよね。

岩崎：お弟子さんだし、強い支持者だったよね。向坂派の伝道者みたいな感じだった。

篠原：大体、この辺で。

山本：今日はやめますか？ いくなら、全部いかれた方がいいですよ。

篠原：しかし、私たちも用意が。一旦、このあたりで、文字に起こします。

(第1回聞き取り 終)

第2回 (2016年2月13日)

篠原：今日は第2回目のインタビューということで、奥田八二先生の知事選の出馬前後の話をお聞かせいただければと思っております。

—地区労と県評の関係—

岩崎：奥田さんと私との付き合いみたいなことから言えば、奥田さんが書いた『地区労とは何か』という本があります。当時、日本の労働組合は企業別組合でしたが、そうではなくて、労働者全体で考えるというところに、私は興味があったから、奥田さんの地区労組織の本を、かなり読みました。

その中で私がやったことは、県評の運動方針の中で、地区労が、どういう運動をしたかということを書き留めるようにした。運動方針の中に、一項、「地区労の動き」という

ものを作って、そこに必ず各地区労からの報告書を一緒に載せるようにしました。

山田：地区労と県評の関係というのを説明していただいてよろしいですか。

岩崎：県評というのは、総評の組織です。

山田：それぞれの各県ごとに。

岩崎：そうです。それは何かと言うと、総評系の組織が地域でも手を繋ごうということで、県評というものを作りました。だから、県総評というところもあるし、県評というところもあります。

山田：福岡の場合は、後で名前が県評に変わった。

岩崎：福岡は県評です。総評議会というのは、総評の下部組織ではないと。つまり、独立しているのだという考え方だった。それで、県評にしたんです。

篠原：奥田先生の本に、そういうことが書いてあるのですか。

岩崎：そこまでは書いてないですけども、地区労という運動が非常に重要だということを書いてあります。

山田：地区労は、各地域ごとに？

岩崎：例えば、福岡地区労だったら、福岡市内の労働組合を横につなぐ組織として作った。

山田：その地区労と県評との関係というのは？ 上下関係というわけではない？

岩崎：上下関係というわけではないけれども、県評の下部組織みたいな形ではありました。

山田：実際には？

岩崎：はい。

山田：ということは、県評の運動方針に従って、地区労が運動するという理解でよろしいですか。

岩崎：はい。そういうことです。それがあったので、前年の報告のところに地区労の報告も必ず入れて、地区労が県評方針と、どう関わって、どういう運動をしたかということを書くようにしました。

山田：現場に一番近いのは地区労ですよ。地区労の中で、その人たちが見ている中で浮かび上がる問題というのがありますよね。その問題が逆に県評に上がっていくということとはあったのですか。

岩崎：それは作りました。

山田：県評のところで、例えば会議体がありますよね。その中に地区労の代表者は？

岩崎：必ず出席しました。県評の中で評議委員会、それから単産代表者会議というのがあって、いずれも地区労の代表者は必ず参加していました。

—県評の組織—

山田：県評の組織について聞きたいのですが、議長と事務局長とありますが、岩崎先生は先に議長になられたんですよね。『県評三十八年史』を少しだけ読んだのですが、実際は

事務局長の方が責任は大きいわけですね。

岩崎：現実的に、県評の運動を切り回していくのは事務局長です。

山田：議長はどういう役割なのですか。

岩崎：単産代表から選んで、全体を統合するということです。

山田：議長は単産から選ぶわけですね。

岩崎：はい、そうです。

山田：それで、事務局長があつて、今おっしゃった評議会があつて、実際の意思決定の一番重要なところは評議会？

岩崎：県評大会。

山田：県評大会が、最終的に承認する。実際に、草案とかは？

岩崎：県評の評議委員会が必ず事前にあるわけです。

山田：評議委員会で案を作って、県評大会で承認すると。

岩崎：そうです。

篠原：議長の任期は何年なのですか。

岩崎：議長は当時2年でした。

篠原：事務局長は？

岩崎：事務局長も2年でした。

篠原：一緒に選ばれるのですか。

岩崎：はい。一緒に選ばれます。

篠原：労働組合と政党との関係をお伺いしたいのですが。社会党との関係は？

岩崎：社会党一党主義の方針を必ず持っていました。

篠原：共産党との関係は、どのようなものだったのですか。

岩崎：組合によって、共産党主義の組合もあります。政党支持の自由という方針を持つ組合は、共産党支持です。社会党系は、社会党一党主義という方針を決めている。

これは、なぜかという、例えば、原水爆大会などがあつた時に、共産党系の原水協と、原水禁という社会党系。どっちに行くかで問題になるので、県評としては、原水禁のほうに変わる。だけれども、原水協のほうに変わってはいけないということは、県評は方針として取りませんでした。それは、単産の自由だということでした。

篠原：政党支持の自由を掲げる労働組合は、大体、共産党ということですが、具体的にどういう労働組合が、政党支持の自由を掲げているのですか。

岩崎：全日労、全金（全国金属労働組合）などです。

篠原：なぜ、彼らは政党支持の自由を掲げているのですか。

岩崎：共産党員の指導部が多かったから。

山田：過去、単産ごとの中で、当然、色々な組合があると思いますが、1つの組合の中で、社会党系と共産党系が両方入るのは結構ありましたか。

岩崎：全部そうです。

山田：あとは、どっちが主導権を握るのかで、方向性が変わる。では、主導権が一時期、共産党だったのが社会党に移ったり、また逆もあるのですか？

岩崎：日放労の中は、そうでした。一番最初は共産党支持だったのが、上田哲が委員長になった頃から、社会党系に移りました。

篠原：全体としては、社会党支持が多かったですか。

岩崎：圧倒的に多い。社会党支持の中でも、御三家と言いまして、国鉄、自治労、教組の3つは、総評の御三家。そうした人たちが、中心的な運動になってくれたことは確かです。

山田：岩崎先生が県評の事務局長時代の時に、共産党系の方向と社会党系の方向で、大きな対立点みたいなものは何がありましたか。

岩崎：運動方針の中の政党支持に関わる部分では、毎年、修正案が出ました。

山田：例えば、さっきおっしゃられました……。

岩崎：政党支持の自由にすべきだということです。

山田：それは、毎年？

岩崎：毎年です。ただ、全体的には、数は問題になりませんから、運動方針上は毎年、社会党一党支持で通りました。

—県評の活動資金—

山田：お答えできる範囲でいいのですが、当然、運動する場合はお金の問題が発生すると思いますが、県評の活動資金は全部自前ですか。それとも、総評から、ある程度支援があったのですか。

岩崎：総評からのお金は、ほとんどなかったです。奥田選挙をやる時には、御三家の委員長と一緒に私が、総評に「補助金を別に出してくれ」と言って、取ってくることはありました。しかし、日常的には、総評からお金が来ることはありません。

山田：逆に、上納金ではないですが、総評にあげるというルートはあったのですか。

岩崎：上納金もないです。上納金は、単産があげてますから。県評は一切関わらない。

山田：逆に、県評の活動資金は、各労働組合が出すわけですよね。総評の方にもお金を出すし、県評の方にも会費という形で、両方出すわけですか。

岩崎：そうです。

山田：それは大体どのくらいなのですか。規模にもよると思いますが。

岩崎：毎年、会費はいくらと決めます。

篠原：毎年、変わるのですか。

岩崎：毎年変わる。

山田：組合員費として？

岩崎：はい。

山田：では、大きなところは、組合員……。

篠原：組合員費はどれくらいなのですか。

岩崎：年史をお持ちでしょ。あれを見たら書いてあります。

篠原：県評で、支出が一番多かった項目は何ですか？

岩崎：県評の役員などの行動費ですね。それから、印刷費などは当然、会費から出していました。

篠原：選挙の時には、多く使うということですね。

岩崎：私の前任者に、名田さん（名田重喜氏）という事務局長がいたのですが、この人の頃から、政治資金として、組合員一人あたり 100 円のカンパをもらってました。

篠原：それは、まさに政治資金？

岩崎：政治資金ですね。でなければ、出来ませんよ。金はないんだから。

篠原：財政状況についてお聞きしたいのですが、県評は、比較的、お金がある方でしたか。ない方でしたか。

岩崎：割と、あるほうだった。

篠原：労働組合の規模が大きいので？

岩崎：そうですね。組合員数が多かったから。

篠原：この『県評三十八年史』を読んでいると、産炭地の労働者が減ってくるじゃないですか。その影響は、財政面においては、ありましたか。

岩崎：ありましたよ。炭労が減ったのは、非常に大きかったです。

篠原：それでも、お金があったのですか。

岩崎：新たに入ってくる。日放労も新しい会員として県評に加盟したのですが、総評に加盟している単産の下部組織が、全部は入ってなかった。全部入るようにしたのは、私の頃からです。

山田：では、組合員の数は増えたのですか。減ったのですか。炭鉱系が減っていきますよね。一方、それ以外のところの組織化をしていって、最終的には増えたのですか。

岩崎：最後の方は増えてきました。

篠原：減った分もあるけど、それ以上に増えた人が多いので、全体的に増えたということですね。

岩崎：年史の中に、県評の組合員の加入で、どのくらいの単産があって、何人だったかは、できるだけ記録したわけです。

— 社会主義協会の影響 —

篠原：先生は福岡県における社会主義協会の影響について、どのように考えていましたか。

岩崎：圧倒的に、太田派が主導です。

篠原：この社会主義協会と労働組合との関係は、どういった関係なのですか。

岩崎：教育機関みたいなものです。社会主義協会の人たちが、ほとんどの労働組合で労働運動の講師になっていました。

篠原：講演や講座を開いたり？

岩崎：そうです。労働組合も、あの頃はなかなか熱心だったから、毎月1回ぐらいは、分会や組合の大会の他に、運動方針を書くとか、労働講座を開くというようなことは、やっていました。社会主義協会には、大変お世話になりました。ただ、私に代わった頃からは、圧倒的に、太田派の先生が多くなりました。

篠原：例えば、どんな先生がおられたか、分かりますか。

岩崎：大坪康雄、八丁和生先生あたりが中心でしたね。

篠原：その中には、奥田さんは？

岩崎：もちろん奥田さんがいたし、衣笠先生がいました。

篠原：彼らはどういう話を労働者の方にされるのでしょうか？

岩崎：「反合理化とは何か」が多かった。

篠原：それは効果がありましたか。

岩崎：あったと思います。あの頃、反合闘争の労働講座、随分多かったですね。

山本：多かったですね。あれは、奥田さんが書かれたんですかね。『体制的合理化』。機械化になって、労働人口が減らされるという状況が生まれた時には、奥田さんを中心に、そういう話は、かなり敏感に入っていたのではないのでしょうか。

岩崎：そういうこともあって、企業別組合ではなくて、「労働者が連合体として戦っていく方向へ」ということで、奥田さんや衣笠さんは、盛んに労働組合に指導していました。

篠原：そうした考えは、岩崎先生と同じですか。

岩崎：結果として、そうですね。

篠原：ちょっと前後するのですが、社会主義協会の中で、太田派と向坂派があると思いますが、その違いを岩崎先生がどのように理解しておられたかというのを教えていただけますか。

岩崎：太田派は、企業別労働組合の連合体として組織があるという考え方でした。向坂派は、三池闘争があったから、全体の労働運動の中で、労働者の自立性というものを中心にすべきだという議論が多かったです。労働者の自覚とか自立性。

山田：例えば、具体的に現場での闘争の時の方向性というのは、具体的に差が出てきましたか。

岩崎：出てきました。三池が最後に、分裂の途中から、太田派と向坂派では指導方針が変わった。

山田：組合が一組と二組に分かれますよね。この時を巡ってということですか。

岩崎：分裂させまいとしたのは太田派の方でした。向坂派のほうは、断固、労働者の自立性を守ってやっていくことで、かなり強硬な……。

篠原：つまり、純粋な労働組合以外は、切り捨てるというような。

山田：三池を巡って、具体的な形で割れてしまっただけ。

岩崎：そうですね。三池の闘争が終わってからだけだね。

山田：終わってから、評価を巡って、ということですね。その後、先生の時には、太田派が社会主義協会の中で関係が強まった。さっきの話からすると、当時の一番主要な問題の一つとして、反合理化闘争を中心として労働組合の運動を。

岩崎：反戦、反合理化ね。

山田：反戦と言った場合には、後の奥田八二先生の選挙にも関係してくると思いますが、反戦といったところの、太田派と向坂派の違いは？

岩崎：これは、一緒でした。

山田：これは、特に差はない。

岩崎：共産党も一緒でした、反戦ということでは。あの頃、反戦、反合理化が中心だったよね。

山本：そうですね。

—反合理化運動—

山田：例えば、反合理化といった場合に、具体的な運動を、代表的な例でいいので教えてください。

岩崎：月星（久留米）の闘争などは、そうでした。あれは、私が入って総評の支援をとりつけてやったんですよ。

山田：それは、具体的にどういう問題があって、それに対してどう対応したのですか。

岩崎：首切りをできるだけ減らすということ。首切りを減らすためには、なんとかしなければいけないから、国の補助をとるということでやったわけです。

山田：国の補助と申しますと、企業に対する補助金？

岩崎：そうです。つまりゴム産業の状況がかなり悪かったから、その状況を良くするために、「ゴム産業全体を支援するような形で」というのが、当時の私の方法でした。

山田：企業の経営者と共闘する部分はあったのですか。

岩崎：ありました。

山田：それは実際に効果がありましたか。

岩崎：ありました。あれで、月星の場合にはかなり伸びた。例えば、中国に進出したり、いろいろそういうことまで含めて出来た。

山田：反合理化闘争といえば、端的に言えば、首切り反対だと思っていたのですが。

岩崎：それだけでは、やっていけない。

山田：「すでに会社の経営がこうだから」と、押し切られてしまうということですか。

岩崎：そうですね。

山田：だったら、会社の経営を直したほうが、従業員にとってもいいのではないかと。

山本：岩崎さんは、闘争の中身の問題を言われましたが、会社の提案は、栃木県の氏家工場を閉鎖すると。三瀧工場も閉鎖すると。残ったのが、本体の久留米だけでした。閉鎖した工場の人たちをどうするのかということ、違う角度で岩崎さんたちが活動されたと理解されていたらいいと思います。

岩崎：それで、首切りの数はかなり減らしました。氏家や三瀧の工場から移籍をして、久留米工場に入れるということはしました。

篠原：そういう運動方針というのは、福岡県で特別な運動なのですか。それとも全国的に？

岩崎：かなり特殊な運動だったと思います。

山田：そうなる、そのやり方に対する批判もあったのでは？

岩崎：それはありました。

篠原：どういうところから聞こえてきましたか。

岩崎：例えば、山本くんなどは大反対でした。

篠原：なぜ反対だったんでしょうか。

岩崎：私が言ったのは、「この運動方針を呑めば、必ずみんな不満を持つ。不満は持つけれども、今いる労働者の数は減らさないで一緒にやれる。一緒にやっていくためには、これしかないけれども、これでいいか」と聞いた。「これに賛成したら、あなたたちはかなり批判を受けるよ」という話もしたけど、当時の執行部は、私の提起に対して、「それでいい」ということでした。一方で、山本くんの方には、「これではやっていけない」と直訴する人がいた。当時、彼は合化労連のオルグとして働いていた。

山田：合化といいますと、合成化学。

山本：太田薫さんのところですよ。

篠原：ということは、どちらかというと、岩崎先生は現実的な対処方針を考えていたということですか。

岩崎：そうです。

篠原：山本のほうが、原則的な立場？

山本：一部の連中の批判は、岩崎さんの方針に対しては大枠は同調なのですが、氏家工場の閉鎖と三瀧工場の閉鎖について、岩崎さんが会社と上手に、バーターしながらやっていると。岩崎さんが上手にみんなの前では報告されるけれども、隠れた部分が色々あるということも言っていた。「県評の岩崎隆次郎（社会主義協会太田派）」と、次の日の朝、ビラを出すところまで行ったことがありますよね。あれは、私、止めましたけど。

岩崎：ただ、全体としては、私が動かしていた方向に、皆がのってくれた。企業も、ある程度、補助金をもらって助かった。

篠原：それがあある意味、岩崎先生のやり方の特徴ですか。

岩崎：そうではないです。それは一度だけの話です。

篠原：他に、そうした例はないのですか。

岩崎：ないです。ただ、小さな組合で、長期闘争があるようなところを援助して、できるだけ早く終結させて、盛り立てるということはしました。やはり、労働者の数を減らさないことが一番大事だと私は思っていたから。

—労使協調への流れ—

山田：当時、県評の中で、合理化という流れの中で労働組合の今後の方向性みたいなものが議論されていたと思いますが、そこでは、どういう展望だったのですか。

岩崎：私は、民労協的なやり方には反対だった。

山田：民労協のやり方というのは？

岩崎：企業と話し合っ、できるだけそれに近づいていくという方法だった。

山本：結局、大きく、総評、同盟、電気、ゴム。ゴムは県評の傘下ではなかった。それを、一定程度支援したという背景もあるのですが、それと同時に、新日鉄を中心に民労協を作っていた。

篠原：その民労協が、労使協調へ。

山本：一番先に走ったんでしょ。鉄は、総評に加盟していた。鉄鋼労連は鉄に入って、鉄の中で、別に民労協を作って、ややこしいことになっていた。

岩崎：だんだん、それで総評運動が、おかしくなってくるわけよね。

山田：労使協調路線の方に流れていくわけですよ。

篠原：もちろん岩崎先生は、労使協調がすべていいわけではないと思っていた？

岩崎：絶対、良くないと思っていた。

山田：そのために、産業別の組合を作って、経営者側ときちんと対峙できるような方向を、先生は作っていたということですね。

篠原：企業内組合では、もう取り込まれてしまう。

岩崎：圧倒的に向こうが強いわけだから。金は持ってる。権力を持ってる。

山田：産業別に組合を、という方向性で、成果は？

岩崎：それは単産の問題だから、県評からは手がでない。

山田：それは、各産業別の問題だから、県評がどうこうと指導はできないわけですね。

岩崎：単産で考えないといけないから。

篠原：ある意味、そういったところに、社会主義協会の講座等に変えたかった気持ちはありましたか。

岩崎：それほどでもなかった。

—先駆的な福岡県評の動き—

山田：奥田氏との接点は、社会主義協会の講座などをやることで、だんだん関係が深まっ

ていった？

岩崎：そうですね。はい。それと、奥田さんと衣笠さんには、県評が運動方針を書く、『県評史』を作るということに関して、非常に指導を受けました。

篠原：そういうものをきちんと作りなさいと。

岩崎：『県評史』は何かというと、運動の百科事典みたいなもの。どういう運動をしたかということを書いておけば、いざという時に読み返せば、こういう運動をやれるじゃないかという事典みたいなもの。

山田：過去の経験を学ぶことができるわけですね。そういうものを書くべきだということは、奥田氏や衣笠先生などが言われて、岩崎先生も、それを理解されてということですね。

篠原：当時の理解としてなのですが、福岡県の労働運動というのは、日本全国と比べると、かなり先進的なものとして捉えられていたのですか。

岩崎：福岡県評というのは、総評の中でも左で、先進的だということでは、定評がありました。

篠原：ある意味、他の県から学びにくるようなことはありましたか。

岩崎：ありましたね。例えば、知事選挙で政治資金の積み立てを行ったのは、福岡県評が最初ですから。

山田：さっきおっしゃった、政治資金一人100円で、選挙用のお金を積み立てたということですね。

岩崎：はい。

山田：他のところは？

岩崎：そんなことはなかった。飛鳥田さんが横浜市長だった頃に、神奈川県評の人が福岡に来て「そんなことをしてるんですか」と逆に羨ましがられた。現実にお金があったから。一番大きい時には、2億近くありましたから。

篠原：年間ですか？

岩崎：年間ではなく、積立金。奥田の選挙をやった時は、2億ぐらい持っていた。だから出来た。

篠原：そのような取り組みは、福岡県評が全国的に見ても早い？

岩崎：早い方です。

篠原：その後、広がっていったということですね。

—海外の労働運動—

篠原：海外の労働運動は意識されていきましたか。

岩崎：はい。それは意識していました。私が考えていたのは、特にヨーロッパの労働組合です。

篠原：どの国ですか。

岩崎：イギリス、ドイツ。

篠原：ドイツは、東ドイツですか。

岩崎：いえ、西ドイツです。もう、東西連携してたから。

篠原：どちらかというと、イギリスもドイツも資本主義ですが。

岩崎：だけど、労働組合としては、企業別組合ではなかった。産業別労働運動をしていた。

篠原：ソビエトなど社会主義国の労働組合については、どのような？

岩崎：羨ましいと思いましたよ。ソビエトを旅行した時に見たらね。それは、あくまでも国が、ということです。企業別組合の労働組合では、そのまま真似することはできないと思いました。

篠原：日本にとって参考になるのは、イギリスやドイツということですね。

岩崎：そうですね。特に、イギリスを私はよく……。

山本：先ほどの月星のことですが、隣にアサヒ靴というのがあった。ブリヂストン。あそこが、かなり省力化して、300人くらいで、月星さんと同じくらいの一日の生産があった。月星は、倉田一族の同族企業で、労働力をたくさん抱えているのが一つのステータスだった。たくさんの労働力を抱えて、賃金を払っていたら、こちらに太刀打ちできないと言っても理解しなかった。

山田：前近代的な経営方針ですね。

山本：それがベースにあって、岩崎さんたちが色々考えられたというように思われていたらしいと思います。

篠原：いつまでも、何百人、何千人も抱えたやり方では、いきませんよね。

山本：最終的には、2,000人近く辞めました。氏家工場は、革靴を作っていた。三瀧工場と久留米が普通のスポーツシューズを作っていた。2つも閉鎖したわけですから。みんな、こちらに持ってくるといっても、なかなかですね。

—学生運動について—

篠原：学生運動について、岩崎先生がどのように考えておられたかを聞きたいのですが。

岩崎：私は関わっていませんでした。大学時代は。当時は、サークル活動は民青が中心だったからね。東大の場合には。私は民青のやり方について、賛成ではなかった。

山田：民青もそうですし、社青同がありますよね。

岩崎：社青同は、力がなかった。

山田：それは、先生が東大の時の評価ですか。福岡県で県評とかされている時に、学生運動との連携はなかったですか。

岩崎：奥田選挙の時から、やりましたけどね。

篠原：奥田選挙の時には、学生運動との連携をしたということですか。

岩崎：向坂派の社青同との付き合いがあったし。

山田：それは、主に三池の活動との関わり？

岩崎：奥田さんの選挙の時から。

山本：正式には、向坂さんの方は社青同。太田派の方は社青同全国協議会というのがフルネームです。

篠原：社青同と言うと向坂派で、社青同全国協議会と言うと太田派ですね。

山本：確か、『まなぶ』という若い人向けの本があって、『スクラム』を出された時からでしょうね。そういう名前になったのは。

岩崎：太田派のほうの、青年労働者の教育紙は『スクラム』。

篠原：岩崎先生が県評で事務局長だった頃に、福岡県内の学生運動は、どのくらいの盛り上がり、規模でしたか。

岩崎：70年闘争の頃だから、三派全学連が中心。

篠原：そうした運動と県評との関係はどのようなものでしたか。

岩崎：なかったです。奥田さんの選挙の時でも、奥田さんが、九大の教養部で締め出しをやったでしょ、奥田さんが。学生運動からすれば、奥田パーズ。

山田：確かに当時の九大生からすると、評価はあまり良くなかったみたいですね。

篠原：岩崎先生は、そうした学生運動を、どちらかという肯定していましたか、否定していましたか？

岩崎：否定も肯定もしなかった。ただ、労働組合の中で、三派の考え方を持ちこんだら、労働組合が崩れてしまうと思っていた。

篠原：その辺を詳しく。三派の考えというのは？

岩崎：街頭行動です。企業内組合である労働組合にとって、街頭行動は非常に危険だった。

山田：街頭行動の危険性という、デモとか？

岩崎：デモとか、そういうものだけを中心に考えていたから。

山田：要するに、中できちんと組織作りをして現場で闘争を行うよりは、外に出て、デモさえやっていたらいいと。そうになると、実際の労働組合としての組合作りが途切れてしまう。

山本：岩崎さんが言われていた反合理化闘争の原点は、職場が起点だと。職場での戦いだ。旧三派の連中は、街頭行動だと。それではいかんと。やはり、職場の中でという気持ちで運動をやっていた。

篠原：学生運動の代表者と話し合いの場をもつということは、全くしない？

岩崎：しませんでした。ただ、県評が集会をやると……。

篠原：県評の集会に来るのですか。

岩崎：はい。はじめは、ビラもまかせなせなかったけど。私の時代になってから、まいてもいいよっていったけど……。

山田：県評で力を入れられたのは、当然、反合理化闘争もそうなんでしょうけど、いわゆる平和運動ですよ。その時に、学生運動との連携などはなかったですか。

岩崎：特になかったです。九大のジェット機墜落の時は、全体的に動きましたけど。学生も労働者も一緒になって。それから、佐世保の闘争の時は、福岡地区労の学生たちを守った。

—女性の労働運動について—

篠原：先生が事務局長であった頃に、女性にどう働きかけをしていけばいいか、どういうお考えをもっていましたか。

岩崎：あの頃は、婦人部という範囲で女性運動を考えていたが、これはダメだと思っていた。

篠原：どうしてダメだと思ったのですか。

岩崎：婦人だけの問題ではないと。全労働者の考え方に立たないといけない。正規の労働者の半額くらいが非正規の労働者。また、その半額くらいが婦人労働者だった。今でもそうだけど。最低賃金制度問題を前に出して県評が運動をするようになったのは、労働者の格差をどうやってなくすかが中心だった。

山田：その時に、正規、非正規の格差もそうだけど、男性、女性の格差も。労働組合の中にも、女性と男性は、良くも悪くも差がある。男性の組合員のほうで、なぜ一緒にしなければいけないか、みたいなことは？

岩崎：それはなかった。当然、一緒にするべきだという考え方はあった。国民春闘という時代になったから、できるだけ全体の労働者の賃金をあげないといけないという考え方が強くなったから、国民春闘路線ということで、全体的な春闘運動ということで取り組むようになっていたのも、あの頃です。

山田：労働組合の中での女性の組織率というのは、男性に比べて高い？

岩崎：それは高かった。単産系のところは必ず婦人部があったわけ。電通とか全通とかは、かなり婦人労働者が多かったから、それなりに組織として力があつた。

篠原：岩崎先生は、女性に向けて新たな運動はされたことはありますか。

岩崎：残念ながら十分ではなかった。ただ、選挙の時に婦人を前面に出して戦う。女性というのは、考え方がはっきりしてるから、ダメなものはダメで動かない。そういう意味では、女性を先頭に立てて戦う方が有利だという考え方は持っていました。だから、あの中にも書いてるように、「婦人を前面に出した戦い」を打ち出すわけです。

—韓国との連帯—

山田：おっしゃった通り、奥田知事選挙の時に女性を前面に出して、女性の票を取り込むという形だったのですが、金大中救出運動は、今の我々からすると、ちょっと違和感が

あるのですが。

岩崎：あの頃、集会をやっても、ビラを配っても、あまり反応がなかった。ところが金大中事件でデモをやった時、私が街頭演説をした時の反応が非常に良かった。

山田：少しさかのぼってお伺いしたいのですが、県評が、なぜ金大中救出運動に取り組んだのか、簡単にお聞かせください。

岩崎：金大中事件というのは、どうしても見逃せない事件だったから。

山田：光州事件の後だから、全斗煥政権によって、内乱的なものとして裁判になる。しかし、他の国の話なのに見逃せないのはなぜですか。

岩崎：拉致というのは、日本国内で起こった。

山田：それは73年ですね。光州事件の後の運動ですよ。拉致があった上で、光州事件の後に、裁判になって、その時に対する運動？

岩崎：救出運動がね。

山田：それは、県評としてはどういう位置付けだったのですか。

岩崎：労働者の連帯ということですね。そういう人権問題に対しては、労働者が一団となって戦うべきだという考え方だった。

山田：韓国における労働運動との連帯？

岩崎：はい。

山田：労働者を抑圧するような韓国の政権に対して反対するということですね。もう1つ意外なのが、それをやってウケが良かった。特に女性からウケが良かった。なぜ、彼女たちは、そこに関心を抱いたのだと思いますか。

岩崎：単純にいいことと悪いことと、女の人は割り切る。

山田：あれは、誰が見ても悪いと。それで、支持をした。署名運動か何かされたのですか。

岩崎：署名もした。女性の署名は、反応が結構良かった。

篠原：この運動は、最初にどなたが始めたのですか。

岩崎：あれは、私じゃなかったかな。

篠原：岩崎先生が始めたのですか。

岩崎：金大中事件の後、相当、問題になってたし、否応なく、せざるを得なかった。

篠原：総評や社会党から、運動方針が示されたのではなく、自発的にしようと。

岩崎：はい。

山田：他の県の県評でも同じような運動をしていたのですか。それとも、福岡県独自ですか。

岩崎：福岡独自だったね。ただ、他の県もやった。長崎の県評も、のってやってくれた。

山田：福岡県の運動につられて、ということですか。

岩崎：はい。

山田：非常にユニークですね。確かに、福岡の特殊性なのかもしれませんが。それは、朝

鮮半島に近いから？

岩崎：ということでしょうね。九州は近かったからね。

山田：韓国に対しては、東京とは違うんですよね。

岩崎：東京ではデモ行動しかやってない。

山田：署名活動は？

岩崎：なかった。

山田：福岡県の独自の取り組みということですよ。それに対して、やるという時に、県評の他の方から異論は？

岩崎：出なかった。

篠原：社会主義協会の方は、どのような反応でしたか。

岩崎：それは、協会は関係なかった。

篠原：奥田先生を始めとする学者の方々は？

岩崎：もちろん、名前を載せたりすることはありました。

篠原：この運動は、福岡県内の在日の人たちとも連携していたのですか。

岩崎：朝鮮総連とは連携でした。

篠原：民団とは？

岩崎：民団とはしていない。

篠原：朝鮮総連とは、どういう面で連携されたのですか。

岩崎：必ず私は、挨拶に来てくれと言われた。

山本：岩崎さんは、朝鮮の自主的平和統一のスローガンに賛同していたのではないか。

岩崎：自主的平和的統一は、スローガンとしては、我々は支持できた。

篠原：その一環として、この運動も取り組んでいた。

岩崎：韓国、朝鮮と分かれているよりは、1つであった方がいいに決まってるからね。

—知事選と社共の対立—

山田：本にも書かれていましたが、鶴崎の後、亀井になって、革新がどう巻き返すのか苦心されていて、その時、社会党と共産党が共闘しなければいけないという時に、障害になったのが部落問題に対する窓口。そこを少し説明してください。

岩崎：完全に、社会党系と共産党系の部落解放同盟が分裂したことによる直接対決。

山田：解放同盟が分裂して。基本的に、社会党と解放同盟が関係あって、共産党は、また別の方でやっていたかと思っていたのですが。

岩崎：別の方でやっていた。ただ、もともとは、部落解放同盟というのは、社共一緒だった。松本治一郎の時には、完全に一致していた。

山田：同盟が分裂して、社会党系と共産党系に。それが当時の共闘の時の障害になったということですね。そこは、どのように選挙の時に克服されたのですか。

岩崎：まわりの運動が盛り上がっていったので、全体的に反対する理由がなくなってきた。

監査請求して運動が盛り上がってきて、今度こそみんなでやらないといけないという気分になった。その中で、いつまでも部落解放同盟の分裂問題で正面衝突していたら、社会党も共産党も、どちらも票が悪くなる。部落解放同盟にしても、ある程度、そういうことを乗り越えて、運動で一緒にできる場所があれば、一緒にやりたいという気持ちがあったのではないか。うんざりしてたからね。

山田：例の知事交渉を巡る監査請求、朝日の最初のスクープですよ。あれで、流れが大きく変わったとみていいのですか。

岩崎：変わりました。変わったけれども、変えるためにはそれだけの運動をしなければいけない。あの時に社会党がリコール運動をやろうと提起した。私は駄目だと言った。昔、鶴崎の時代は、社会党と共産党と一緒にやっていた。労働組合は分裂していなかった。ところが、あの頃になると、社会党系と共産党系の組合がそれぞれ割れているわけだから、一緒になってやろうといった時に、お互いに足を引っ張ったりしていた。そういうことがなくなるためには、何かそこに運動が必要だと思った。当時、米倉さんという自治労出身の県評の議長さんがいた。その人と話をして、「何かいい手はないか。できるだけ署名運動ができて、運動が広がる方法はないか」ということで考えてくれたのが、あの監査請求だった。

山田：それは、岩崎先生が中心になって、県評が仕掛けていったわけですよ。

岩崎：そうです。

山田：この時の県評の役回り、やはり社会党と共産党とを繋ぐことが出来た組織は。

岩崎：当時は県評しかなかった。もう1つは、県評にお金があった。

山田：監査請求の時の運動費も県評が？

岩崎：全部出した。あの頃、県評は結構、お金を持っていたから。県職とか教組、高教組とか、特に、地公労はさんざん亀井さんにいじめられていたから。なんとかしてくれという気持ちが強かった。非常に県評がまとまりが良かった。

山田：そうですね。公務員は特にやられていたという話ですね。

岩崎：地方公務員は特にね。

—候補者選び—

篠原：そうした運動が知事選へとつながっていくと本の中にも書いていますが、なかなか候補者が決まらなかったと本の中に書いていますが……

岩崎：勝てるか勝てないか、分からないじゃない。そしたら、みんな出ないよ。

篠原：結局は、奥田八二先生になるのですが、奥田八二先生のごことは、実は最初から考えていたのではないのかなと思うのですが。

山田：奥田日記を拝見していると、結構、早い段階から……。

岩崎：奥田さんはそういう考えでした。早かったです。私も、当時太田派だった大坪康雄さんという人がいた。東京の事務局にいたのですが、この人を、私は非常に信頼していたから、相談に行った。そしたら、「心配ない。奥田さんが最後は出るよ」と言ってくれた。

篠原：それはいつの段階で？

岩崎：最初の段階。

山田：その時に、岩崎先生の頭の中では当然、何人か候補者が浮かぶわけですよね。最初から、候補者の一人として、奥田氏はあったのですか。

岩崎：あった。

山田：結構、有力な？

岩崎：有力です。最後は、引き受けてくれるということですね。

山田：その前に、斎藤文男さんや具島先生に、一応、頼みに行くわけですよね。そこは、行けば、それでいいし、ダメなら最後は奥田八二氏に頼めば、どうかなるんじゃないかという目算はあったのですね。

岩崎：はい。

篠原：逆に言えば、奥田先生に最初に声をかけなくて、他の人に声をかけたのがなぜですか。候補者としての奥田八二よりも、いい人がいたから？

岩崎：いえ。できるだけOKしてくれそうな人を選んだ。

山田：ここで聞いていいのかわかりませんが、斎藤氏と具島氏で……。

岩崎：斎藤さんの場合は、マスコミにも名前が出てたから、よく知られていると。どちらかと言えば、県評の運動に対しては、わりと理解がある。私がNHKにいた時代から、斎藤さんは出演者で近かった。斎藤さんには、どっちにしても、声をかけないといけないと思っていた。県評の中でも斎藤さんという声はあった。マスコミに出てたから。

山田：知名度が高かった？

岩崎：はい。

山田：具島先生は、具島先生で色々なところで活動されていた。都留大治部氏はどうだったのですか。

岩崎：あの人は、いざという時には、腹を決めきれないだろうという気がしていた。

山田：奥田日記を読むと、都留大治部氏は、一時期は自分が出るみたいだ。

岩崎：演説はあったけど、私は乗れなかった。それは、都留さんという人は、どちらかという、右に近いという感じがあった。

篠原：一番理想的な人は、どなただと思っておられたのですか。

岩崎：私は、斎藤さんはかなり有力でしたね。でも、どうやって勝つかということを考えた時に、マスコミには出ているが、県評全体として動いた時に、斎藤さんで「うん」と言うかということになると、ちょっと駄目かなと。

山田：どういった点で？

岩崎：労働組合の中では、知られてなかったから。

山田：メディアには出てるけれども、組合の活動はそこまで。

篠原：それと対照的に、奥田先生は、たくさんの講座で講師をして、労働組合の中では、顔を知られていたと。

岩崎：それと、奥田先生は、最後になったら泥をかぶる人だから。

山田：人間的に信頼がおけたわけですね？

岩崎：はい。

山田：それは、どの段階で口説きにいこうと決めたのですか。最初から、そういうことを言っていたのですか。斎藤氏、具島氏がつぶれてしまって、いよいよ。

岩崎：そうそう。具島さんが言ってくれたんだよね。

山田：『逆転』に書いてあった？

岩崎：あれは、あの通り。

山田：その前からということではなくて、具島先生がはっきり言ってくれた？

岩崎：奥田くんがいいよ、と。

山田：では、そこで決まっていったんですね。

篠原：奥田先生が受託してくれた時には、岩崎先生としては驚きではなくて、

岩崎：ほっとした。

—奥田候補の決定—

篠原：候補としての奥田先生に、一番期待していたことは何ですか。

岩崎：あの人の顔の広さです。それから、私は九大の中がまとまる方がいいと思っていた。

しかし、奥田さんの名前がちらつき始めて、奥田さんが断り始めたら、九大の反応がすごかった。

篠原：その辺を詳しく。

岩崎：奥田さんは気の毒だと。あの人は、犠牲者になって出るつもりだと。だから、応援しないといけないという感じが聞こえてきた。

篠原：一方で、奥田先生について懸念していたことはありますか。

岩崎：演説があんまり上手ではなかった。大衆を煽り唆すような演説ではなかった。

山田：この間も、座談はいいけど演説は下手だとおっしゃってましたが、どんな感じなのですか。淡々と喋るような感じですか。

岩崎：ぐじゅぐじゅ言う感じ。声も大きい方ではなかった。

篠原：それだけを聞いていると、あまり候補としてふさわしくない面も多いような気がするのですが。

岩崎：背もあんまり高くないし、演説もあまりうまくない。でも、「出る」といって腹を決

めてくれた後は、運動で盛り上げていこうと私は考えていた。

山田：運動というか、戦術だと思いますが、非常に画期的だったのではないかなと思うのですが、さっきの女性の話とも重なるのですが、社共を前面に出すのではなく、県民党的な形で、広い形で組織化していく。だからこそ、勝てたと思いますが、それは、どなたが最初に考えたのですか。

岩崎：私もそうだったし、太田派の人もそうだった。

山田：奥田日記にも、ご本人が候補者になる前から……。

岩崎：あの時は、亀井が駄目だということがはっきりしていた。きれいか汚いかとか、そういう簡単な言葉で表現した方がいいと私は考えていた。

山田：岩崎先生もそう考え、太田派もそう考え、奥田先生もそう考えて。一方、日記を読むと、奥田先生の見方だと思いますが、共産党が逆に、彼らの党利党略的な感じで自己主張して、うんざりするところが何度か見られたのですが、実際に選挙戦を戦っている時に、社共が共闘というのが基礎だったと思いますが、そこに軋轢などはありましたか。

岩崎：それはなかった。私が市長選に出た時に、社共で私ということで出たけれども、選挙の間中、喧嘩ばかりしていた。

山田：それは、いつですか。

岩崎：1968年ぐらいじゃなかったかな。

山田：その時は、ぎくしゃくしてたんですね。その時に比べると？

岩崎：全然違う。

山田：それは、今から振り返った時に、なぜうまくいったと思いますか。

岩崎：監査請求が出たから。ちょうど倍くらいの票数になっている。

山田：監査請求の運動が事前にあって、それを基盤としてさらに広げていったということですか。

岩崎：そうです。当時、亀井がとても強かったから、普通なら勝てると思わない。「なんか、いけそうだ」という感覚をみんなに与えることが、とても大事だった。そしたら、監査請求が当たって、どんどんみんな署名人になってくれた。

篠原：ある意味、新しい選挙運動だったと思うのですが、旧来型の労働組合の人たちは全面的に賛成していたのですか。

岩崎：そうでもなかった。福岡地区労は最後まで署名が悪かった。

篠原：つまり、反対もあったということですか。

岩崎：反対はなかったが、積極的でないところはたくさんあった。

篠原：それは「奥田先生に対して」ということではなく、新しい運動に対して積極的になれないということですね。

岩崎：私は、あの時に監査請求というものを考えてくれた自治労や米倉さんには、とても感謝した。これしかないと思った。つまり、150万を超えるような票を集めないといけな

いのだけれども、社共が統一していない段階でやった場合には、労働組合のまとまりが悪い。それがなくなって、全体が動き出していくことになれば、まとまりがいい。反対することがないから。

—奥田陣営の選挙戦術—

山田：今の点と関わると思いますが、奥田陣営の選挙戦術で特に重視した部分は何ですか。

岩崎：私は労働組合の選挙の票集めは、あまり信用していない。ちょっと書いてたでしょ？つまり、組合員に一人何票と割り当てたら、それが全部票になってると思うわけ。だけど、そんな話ではない。だから、現実みんなが動いて集めてきた票しか、票にはならないと思っていた。どうやって、みんなを動かすかということを中心に考えていた。しかも、動きやすいほうがいいから、行ったら署名を書いてくれるという条件をつけたら、もっと運動が広がる。

山田：行って署名をしてもらおう？

岩崎：行ったら署名してくれる。なら、行こうかという気になる。ところが、その前の選挙は、社会党が推薦し、労働組合の推薦をして、「お願いします」というだけ。それは票にならない。

山田：本の中で票読みをされていましてよね。それが非常に的確な票読みでしたが、それは今、おっしゃった部分と重なるのですか。

岩崎：重なります。

山田：署名をもとに票読みしたということですか。

岩崎：そうです。それから後、地区労単位で、みんな動いた。その票の集まり具合と両面から。

篠原：先生が、今おっしゃられた新しい票読みの仕方は、いつぐらいから自分の中で明確になっていったのですか。

岩崎：監査請求を始める時から。

篠原：今までの労働組合のやり方では駄目で、こっちだと思った？

岩崎：はい。動きやすいところだから、動いてくる。動きやすいから、票が集まってくる。また、運動が伸びるじゃないですか。元気が出るから。義務感みたいなもので票を取りにいったのでは、選挙にはならない。

山田：動員型では駄目で、それぞれの人たちが自覚を、ということですね。

篠原：選挙運動から、脱労組みたいなやり方になるわけですね。

岩崎：そうです。

篠原：そうすると、また戻りますけど、県評の内部で、このような選挙運動を続けることに積極的でないところはありませんか。

岩崎：そんなことはないです。それはなかった。みんな、内心、考えているわけです。

山田：奥田県政を、どう実現するかということをや？

岩崎：そうです。それから、あの頃から、参議院が全国区になった。私は教組の人に「岩崎さん、あなたは、すごい熱心だけど、上田哲の票が福岡市内でどれくらい出ますか」と言われた。「5,000 票は出します」と言った。そしたら、啞然とした顔をしていた。だけど、現実には 5,000 票以上、福岡市で出しました。あの参議院の全国区の勝敗を見ても、大きいところの票は悪かった。票が出てない。つまり、これは労働組合の選挙運動が限界があると考えた。

篠原：そこから、このようにつながっていくわけですね。

山田：実際、この時の選挙で、県議会議員では、社会党と共産党が議席を下げてますよね。

奥田革新政権と言われますが、実際は本来の基盤である社会党、共産党に関しては、以前と比べると支持が下がっていたという現状だったということですね。

岩崎：はい。県議選では下がっていた。次の選挙からは県議が伸びる。

篠原：少し話が変わりますが、この時のお金についてお聞きしたいのですが、選挙はお金がかかるとは思いますか、県評で大体は出した？

岩崎：ほとんど全額出しました。

篠原：大体、どれくらい？

岩崎：2 億。

篠原：そうしたお金ですが、カンパは集まりましたか。

岩崎：集まった。

篠原：一般の市民からの？

岩崎：一般の市民からのカンパはあてにしなかった。ないと思っていた。あてにできないと思っていた。

篠原：署名は、かなりの方がしてくれるけれども、お金は出してくれないであろうと。

岩崎：あてにしていけないと思っていた。奥田さんが選挙で歩いた時は、各地で、ご飯を作ってくれたり、事務所に集まってくれたりということは、前の選挙よりはるかに増えていた。

山田：前回の選挙と比べた時に、これはいけるんじゃないかという感じはありましたか。

岩崎：かなり早い段階でね。

山田：奥田日記を読むと、最初は本人もかなり不安なんですよね。だんだん運動していくうちに、本人の中でも、いけるではないかというムードが出てきた。

岩崎：私は、割と早かった。1 月くらいにはこれはいけるだろうと思っていた。

山田：前回の選挙戦との比較で、反応が全然違うと。

岩崎：私は意識調査もやりました。意識調査の結果でも思った通り出ていた。『逆転』の中に書いてるでしょ。今度は勝てそう……みんなに笑われたけど。実際に、あの頃はそう思っていた。これは、勝てると思っていた。

山田：奥田氏を口説く時に、その時は選挙に当選するか落ちるか、わからないし、お金の話で言えば、本来の定年よりも先に辞めてしまう。具体的に退職金に大きく差が出るかあると思いますが、その時に、奥田先生は何を気にされてて、それに対して、どのような対応をされたのかということをお聞きしたい。

岩崎：まず、お金の心配のところ、少なくとも損失が起こる分は補填しなければいけないということで、200万。

山田：これは、先ほどの県評の政治資金から出されたということですか。

岩崎：そうです。

篠原：実際には、渡してはない？

岩崎：徳本さんに預けました。200万。

篠原：実際に当選したから。

岩崎：返してもらった。

山田：そこに徳本先生が中に入った理由は何ですか。奥田日記も、徳本さんにお問い合わせという記事があった。

岩崎：直接でないほうがいいと思ったから。

山田：直接は話しづらいということで、中に徳本先生が入ってまとめたということですね。

岩崎：はい。徳本さんは、あの頃、教養部だったから、奥田さんと近かった。だから、できるだけ近い人に話をするべきじゃないかと思った。

山田：もし駄目だった場合には？

岩崎：事務所を作って、奥田事務所をそのまま残して、4年後にもう一度選挙をやるつもりだった。

山田：それは、奥田先生は了承されたのですか。

岩崎：了承していた。

篠原：それができるくらいのお金が県評にあった？

岩崎：あった。

山田：奥田先生も、そこで腹をくくられたわけですね。

岩崎：もう逃げられないなと思われたんでしょうね。

山田：単に1回やって駄目だったということではなく、次もやる構えで、ということですね。

岩崎：奥さんが問題だったから、できるだけ奥さんの心配が薄まる方向へ、私は周りを固めていった。

山田：ご本にも書かれてましたが、最後、落とさなきゃいけないのは、ご本人ではなくて、奥様だったということですね。

岩崎：だから、幸夫人は、最後まで当選しないのではないかと考えていた節がある。

山田：奥さんも選挙の街頭運動に立たれたんですよね。だけれども、最後まで半信半疑で。

岩崎：最後の最後まで半信半疑でした。最後に書いてるでしょ。「5,000 票の差で逆転されるかもしれないから、まだ当選したなんて言わないほうがいいですよ」と。あれは、本気でそう思ってました。私はデータで当選確実が出るのはわかってたから平気だったけれども。

篠原：次回は、この奥田県政のお話をお伺いしたいと思っております。今日は、長時間ありがとうございました。

(第2回聞き取り 終)

第3回 (2016年3月25日)

—奥田氏と県評—

岩崎：県評の方針と知事の方針に食い違いがなかったかという点について、まずお答えします。北海道と、ちょうど同じ時期に、横路さんが知事になり、選挙の仕方も同じような市民グループを作っていくという北海道の方針と、県民の会を核として広げていくという我々の方針と、2つあって、非常によく似ていた。ですから、北海道と福岡は、比較されることが多かった。あの時に、私が考えていたのは、県評の方針と知事の方針の違いについて、どう整理するかということについては、社会党、共産党と3者で協議した結果、知事が公務として行うものについては、そのまま行っていく。北海道の場合には、そういう感じがありませんでしたから、自衛隊の観閲式に知事が出席するかということについて、横路さんと北海道地評の間で、だいぶ食い違いがあった。福岡では、そういうことはありませんでした。

篠原：つまり、福岡では奥田知事が自衛隊の観閲式に出席することについては？

岩崎：別に構わない。知事の職務として行うものについては、県評は意見を言わないということだった。

篠原：意見を言った点というのは、どういうことなのですか。

岩崎：なるべく言わないようにしていました。自分たちが作った知事ですから、守らないといけないという考え方のほうが強かった。特に奥田選挙が終わった時には、警察の方から、例のお布施事件で攻撃がかかってましたし、右翼が知事に対して、県庁内で暴力をふるったということもあったので、どうやって守るかということの方が、我々にとっては主体になりました。社共と3者で話した時も、知事が公務として行うことについては、3者はものは言わないと。よほどのことがないかぎりですね。だから、天皇が病気で記帳があったが、奥田さんが行くことについては、我々は何も言いませんでした。県庁に記帳名簿を置くということについても、構わないという見解でした。

篠原：そのような方針をとって、県評内、労働組合内でおかしいという意見は出なかったですか。

岩崎：出なかったです。それは自分たちが作った知事なので、どう守るかということが先にあった。

篠原：奥田知事の県政の運営で、定期的な会合を作って、こちらから意見を言っていたということはあるですか。

岩崎：あります。それは、毎月1回。

篠原：会議の名前とかありましたか。

岩崎：県民の会の幹事会みたいなものがありました。それと知事と談合するというので、県評、社会党、共産党の3者で知事と会って、月1回やっていた。知事が自分の方針を説明していた。

篠原：そこで、対立などはありましたか。

岩崎：ありませんでした。だから、その点は、社会党、共産党との話の中で、かなり最初から問題になったところなのですが、党の方針と知事の方針は当然違うということで、3者は合意していた。事前の合意があったから、知事を候補に決めるまでは大変苦労した。社共共闘の連携ということでも苦労しましたが、結果的には、それが後で生きてきたということですね。

山田：今、おっしゃっている枠組みというのは、選挙の前の社共合意で作ったということですか。当選してからではなく、その前ということですね。

岩崎：そうです。

山田：さっき言われた会議の名前は、『我、公舎に入居せず』で、岩崎先生も座談会に参加されていますが、そこで出た「県政推進会議」のことですか。

岩崎：それが、県民の会の幹事会。

山田：知事と定期的に会って、話をするということですね。

岩崎：北海道評が、「岩崎、お前どうしたんだ」と言うので、今、言ったようなことを話して、「そうか、知事が知事としてやることについてはいいんだな？」と聞かれ、「私はいいと思っている」と答えました。

山田：そうなると、革新政権としての特色はどこで出せるのですか。

岩崎：「県民総立ち運動」で、知事のもと県民に奉仕するというので、県評全体、あるいは県職全体が一致するということがあった。

—奥田氏の理念に対する岩崎氏の評価—

山田：今、「県民総立ち」という話が出ましたが、この点について、岩崎さんの評価やお考えを聞きたいのですが。

岩崎：私は良かったような気がします。それがあったから、田川の生活保護問題は県職が

中心になって、逆に進めてくれた。

篠原：「県民総立ち」という理念は、奥田八二先生がお書きになった本にもよく出てきますよね。「自分たちができることは、まず自分たちがやる。出来ないところで、初めて行政が出てくる」という考え方ですが、この考えは、選挙前からですか。

岩崎：選挙前からありました。知事が候補になる時に、我々と社共 3 者で協定を結びました。その中に一項あるんです。知事と立場が違う時にはどうするか。その時には、知事の行政の立場を重視すると約束しました。

山田：奥田八二氏が、そういう主張をされたのですか。

岩崎：そうです。最終的に、社共と県評の 3 者と奥田さんとの話の中で、今、言ったようなことが約束になったわけです。

山田：それは、奥田八二氏としては、自分は社共や県評のあやつり人形ではないんだと。

岩崎：ということ、非常に強調しました。我々も鶴崎時代に 1 度失敗していますから。

山田：そこを少し教えてもらってもいいですか。鶴崎県政時代の反省があったようですが。

岩崎：労働組合が前に出すぎていた。

篠原：例えば、どんなところで「出すぎていた」のですか。

岩崎：人事の問題から何から。だから、非常に県民の不満が大きかった。県庁内の不満も大きかった。社会党が県評と近いところだけを大事にするという考え方が強かった。だから、そういうことはしないということを協定で決めた。だから、事前に協議したことが、結果として良かったと思っています。

山田：例えば、県庁内の人事に関しても、よくある幹部人事の場合は、政権が変わると大幅に入れ替えるということ？

岩崎：それは、しませんでした。

山田：それは、鶴崎県政の反省から？

岩崎：そうですね。

山田：意図的に抑えたということですか。

岩崎：抑えたというか遠慮したということです。県職の方が。

山田：県職の方が遠慮した。

篠原：今、岩崎先生がおっしゃったことは、1 期目は分かるような気がしますが、2 期目、3 期目、合計 12 年にもなるわけですよ。

岩崎：そういうことが守られたから、12 年やったということですよ。

篠原：だんだん労働組合や県評側に不満が少しずつ出てくるということもなかったですか。

岩崎：なかったです。自分たちの知事だから、守ることが先に来ていました。だから、事前ではかなり議論になりました。社共、県評と知事との間で。しかし、かなりはつきり協議していたので結果的には楽でした。

山田：「県民総立ち」、特に福祉などはそうだと思いますが、「自助」、まずは自分でやれる

ところはやって、地域の中で「共助」という形でやる。それでもやれないところで、初めて行政が出てくるという「公助」。その考え方は、今の時点で見ると分かりますが、当時の時代から見た時に、革新政権がとる考えなのかというと、だいぶ違ったような気がするのですが。

岩崎：「革新とは何か」という考え方に、あなたが少し思い込みがあるのではないですか。

山田：「革新」というのは何ですか。

岩崎：「県民への奉仕」が革新の第一の仕事とっていた。

山田：「自分たちでやれることは自分でやりなさい」ということは、見方によっては行政でやるべきことを自ら小さくして。

岩崎：そんなことはないです。やりすぎた分については、福祉の問題でも削りましたが、福祉全体としては、生活保護費等の過剰支給はなくなりましたから。逆に予算が縮まったんですよ、あの時に。

山田：当時、問題になっていたのは、本来ならば生活保護をもらわなくてもいいであろうと思われる人たちが敢えて申請をして保護をもらっていたが、そういったものはなくなった？

岩崎：なくなりました。各県から視察が来ましたよ。どうやって減らしたのかということについて。

篠原：そのことについてですが、自分でできることがやっていくというやり方は、奥田八二先生がイニシアティブをとったのですか。

岩崎：それは、むしろ、県評の考え方でもありました。

篠原：県評の考え方ですか。それは、奥田先生が当選後に目立つようになってきているような気がします。

岩崎：そんなことはないです。知事になる前は何を言ってもどうしようもないと。知事になってからの話という考えでした。知事になって県評が中心になってやったことは、まず「県産品愛用運動」を定期的に広げていくこと。これで毎月1回ぐらい集会をやった。各地の県産品の展示会をやったり、それをみんなが買いに行った。私も買いに行きました。そういう集まりの他に、知事が視察に行った時には、必ずその土地に泊まってくることにした。

篠原：日帰りではなくて、宿泊をするということですか。

岩崎：そうです。田舎の方に行ったら、知事は、昔で言えば勅任官ですから、知事閣下ですよ。そういう方が泊まってくれるということは、大変な歓迎だった。

篠原：それも、奥田先生が知事になる前から考えていたことなのですか。

岩崎：はい。私は、2期目をとるということを考えていましたから。

篠原：1期目を当選した直後から？

岩崎：はい。2期目、3期目をどうやってとるかということで、できるだけ県民と知事が接

しておいた方がいいと思っていた。

山田：「県産品愛用運動」は、今の政府の言い方だと「地方創生」、「地域作り」などいろいろな言葉で言われ、今は当たり前のことですが、非常に早い考え。ちょうど、大分で「一村一品運動」が展開されていましたね。

岩崎：そうです。あれは、影響を受けましたよ。大分のようなやり方をしたら、「全国漬物品評会」みたいになる。一村一品なんて言ったら。

山田：そことの違いを、もう少し説明してもらえますか。

岩崎：地域全体の産物をどういうふうに見るかということで、展示会をやっていたわけです。

山田：そうなる、視点は「県民」ということですか。

岩崎：はい。

山田：着目は都市部ではないですね。

岩崎：はい。

山田：それは、さっきおっしゃったように一つは次の選挙を見据えた時に、従来、革新側は、都市の労働者が中心なので、都市は押さえられるが、そうではないところは弱いと。

岩崎：だから、奥田県政になって 2 期目の時には全市町村で勝った。私は、何年もその前に知事選で失敗している。都市部は固められるけれども、地方は負ける。それをなんとかして変えたいということはある。

山田：奥田八二氏自身が、ご出身が農村出身ということもあって、むしろ喜んで行かれた？

岩崎：喜んで行きました。それから、奥さんも随分あちこち行きました。私も 1 期目の間に、全市町村で 1 泊しました。

篠原：繰り返しになりますけれども、「県産品愛用運動」や「県民総立ち」は、県評の考え方でもあったということですか。

岩崎：そうです。それと奥田の公約でもありました。

篠原：そして、ある意味、岩崎先生としては 2 期目のための選挙運動も兼ねてやっていたということですか。

岩崎：そうです。

篠原：それが選挙運動であることは、奥田先生も認識されていた？

岩崎：分かっていました。社共も分かっていました。

篠原：そうすると、議会では多数であった自民党は反対というか。

岩崎：非常にやりにくかった。

篠原：それが選挙運動とは分かっているけれども、反対をするわけにもいかない？

岩崎：いかない。

篠原：いかないですね。公務の一つですから。次に、奥田先生の本の中では、「県民党」という言葉がよく出てくるのですが、この「県民党」という概念を最初に考えたのは、

奥田先生なのですか。

岩崎：というよりも、3者協議の中で、県民党という言葉を使ったのです。

篠原：3者というのは、県評と社会党、共産党。ただ、「県民党」というのは、何を意味しているのかというのがわかりにくいですよ。党があるわけではないので。

岩崎：あの時は、きれいか汚いかで選挙をしたわけです。きれいか汚いかで県民の判断を仰ぐ以上は、県民の考え方で県政運営をしなければいけないという考え方。それに「県民党」という言葉を使ったにすぎない。

篠原：つまり、具体的な組織があるわけではなく、運動の総称としての「県民党」ということでしょうか。

岩崎：そうです。

山田：実際、当選後、力を入れられたのは、組織ではないということであれば、知事が直接、それぞれの地域に行って、地域住民との間で対話をしていき、意見を聞く。それを県政に反映させるという姿勢をとり続けたということですね。

岩崎：そうです。だから、県評の姿勢は、かなり柔軟ですよ。

山田：おっしゃる通りですが、やっていることは保守政治家がとりそうな手法ですよ。

そういう発想になられたのは、岩崎さんが奥田氏と話して？

岩崎：はい。何期できるかということが、非常にポイントでした。鶴崎県政の時は2期だった。その前の杉本知事も2期です。それよりも長い期間、権力を維持したいという考えが非常に強かったです。

山田：1期目にどれだけ基盤を固めていくか。

篠原：ある意味、2期目、3期目にならないと、本当にやりたいことができないということですか。

岩崎：できない。1期目はできない。それは初めから労働組合の中でも言いました。県評の幹事会でも、1期目にやることはできないと。それは『逆転』にも書きましたが、1期目は、我慢のしどころだと思っていましたから。

篠原：議会は、野党が大きいですからね。

岩崎：その間に、どれだけ県議会を増やせるかということで、2期目で2人増やすのですが、2人しか増やせなかった。やっぱり向こうは強いですよ。そういう中で勝っていくためには、相当、柔軟でなければ、やっていけないという考えでした。

山田：1回目の選挙は、知事公舎問題というのが発端となって。

岩崎：ある意味でブロックです。

山田：ですよ。たまたまチャンスをつかんだ。それは、たまたまであって、次に確実に勝つためにはどうするのかということですね。

岩崎：次の選挙でどうするのかということしか、私の頭の中にはなかったです。

篠原：そのためには、労働組合があまり前に出すぎないで、知事を守るために黒子に徹す

るみたいな感じですか。

岩崎：はい。

—生活保護費や失業対策費の削減について—

篠原：「生活保護費」についてお聞きしたいのですが、私たちが調べて分かったのですが、当時、福岡県が一番、生活保護費が多かった。これが、グラフなのですが。

岩崎：かなり、急激に減っているでしょ。

篠原：そうです。奥田先生になってから削減したということなのですが、これについて。

岩崎：共産党？ 何も言わなかった。

篠原：どうもそれが理解しにくい。

山田：共産党もそうでしょうけど、支持基盤となると、抵抗してもおかしくないかなと思うのですが。

岩崎：いいえそんなことはなかった。結局、それでやると、もっと絞められてしまうわけ。

県民から反発を受けた場合には、必要以上に削減しないといけなくなる。そういうことを、かなり粘り強く説得しました。

山田：説得というのは、どこに対してですか。

岩崎：特に産炭地域。

篠原：ということは、当時、福岡県民は、産炭地にたくさんの生活保護費がかかっていることを、批判的に見ていたのですか。

岩崎：かなり批判的に考えていた。

篠原：既に批判的だった土壤があるんですね。

山田：亀井県政時代は、手をつけてませんよね。

岩崎：それはできないですよ。

篠原：それはなぜですか。

岩崎：知事のやることは全部反対だったから。こちら側から言えば。

篠原：労働組合が？

岩崎：労働組合にしても、革新側にしても。

篠原：やろうとしている内容ではなく、知事がやることに反対ということですか。

岩崎：そうです。

山田：仮に亀井県政が、奥田県政がしたことをやろうとしたら？

岩崎：かなり反発になったでしょうね。あの時は、県職の人たちが現地に入って、生活保護費の不正受給について、説得してくれました。「これをやったらかえって、あなたたちが、かなり損しますよ」ということをかなり粘り強く説得してくれた。それが、効果をあげたんです。

篠原：不正受給の実態があるというのは、もう掴んでおられたのですか。

岩崎：新聞記事にも、さんざん書かれていた。生活保護費で人数をごまかしたり、支給実態をごまかしたりして、かなり摘発された。

篠原：は、こうした事を良くないと考えていた？

岩崎：はい。

篠原：しかし、亀井政権下では、削減には着手できなかった。

岩崎：県職員が行くわけでしょ。やる気がないと説得できないじゃないですか。県民党ということで、県職員が説得する気になったから、出来たことなんです。だから、官僚の使い方の問題。

山田：県職員が行く気になったといった場合に。

岩崎：自分たちが作った知事だということが一番大きかった。

山田：職員の意識。いわゆる幹部クラスではなくて一般職員の方が。

岩崎：一般職員の方が、先に変わったということですね。

篠原：失業対策費も奥田県政期に減らしていますよね。これも同じようなことですか。

岩崎：同じようなことです。

篠原：失業対策費も不正受給があったということですか。

岩崎：いいえ。そうではなくて、他に財源がないかということで探しました。

篠原：失業対策費に替わる他の財源がないか？

岩崎：はい。

篠原：どういうことですか。

岩崎：奥田県政の間にかかなり貯金が増える。そのようなものを使っていました。

篠原：何に使っていたのですか。

岩崎：福祉面に。

山田：失業対策費という形での予算の計上はせずに、別の基金などのお金を使って、実質的な補助をしていたということですか。

岩崎：はい。

篠原：それは、どうして失業対策費を使わないことにしたのですか。

岩崎：それが、鶴崎県政の失敗でもあったから。

篠原：失業対策費を使ったことが、失敗になった。それはどういう意味で失敗になるのですか。

岩崎：全日労が働かないでお金だけもらっているという県民批判に応えられなかった。鶴崎県政の失敗というのは、我々にとっては反面教師でした。

山田：：良くも悪くも目に見える形で、利益誘導が行われたように見えたわけですね。そうではない方からの批判が強かった？

岩崎：強かったです。弱いところ、革新側は足をすくわれるから。おまけに県議会は、自民党が多数だし。

篠原：この失業対策費や生活保護費を削減することに対して、自民党はどのような反応でしたか。

岩崎：黙っていた。

篠原：積極的に賛成ではなくて、黙っていたのですか。

岩崎：黙っていた。ものが言えなかった。革新県政を認めることになるから。

篠原：一般の県民の反応はどうでしたか。

岩崎：県民の反応は、そういうものが減ったということが新聞で報道されれば、悪くないよね。

篠原：肯定的な評価をしていたということですね。繰り返しになりますが、生活保護費や失業対策費の削減に、反対意見というのはなかったのですか。

岩崎：なかった。

篠原：全く？

岩崎：全くなかったです。田川のあたりでは、行けば暴力で脅されるところもあったから。そういうところに、県の職員が入って行って説得した。よほどの覚悟がないと、県職員も行けない。

篠原：でも、行ったわけですよ。

岩崎：行った。

篠原：覚悟もあった？

岩崎：覚悟もあった。県民総立ちというところもあった。

篠原：ある意味、不正受給をしていた人たちも納得したということ？

岩崎：納得させたんだろうね。

篠原：その合意をとりつけるのは、大変な仕事だと思うのですが、スムーズに行くとは思えないんですけど。

岩崎：やったらうまくいったということです。現実にもうまく行って、予算も増えていくし、貯金も増えていくという状況になったわけですから。

篠原：ただ、奥田県政期には、毎年、減らしている。最初の年に生活保護費を減らしただけでなく、次の年も、その次の年も継続して減らしていくわけです。

岩崎：だからといって、法律違反で減らしたわけではないですから。

山田：受給の適正化ということですよ。

岩崎：はい。

山田：奥田八二氏は、そもそも、筑豊に対する思いというのが非常に強い。そこで、向坂氏と対立するし、確かに不正受給の問題があるということで、筑豊の生活保護費や失業対策費に切り込んでいく。そのあと、それに替わる形で、別のケアをしないと、筑豊は行き詰まる。その時に、奥田先生はどのようなビジョンを考えていらっしゃったのですか。

岩崎：そのところは、あまりはっきりした効果は出なかったけど、2年目くらいから効果が出てきた。

山田：効果とおっしゃいますと？

岩崎：県産品愛用運動とか、知事が泊まりがけで、みんなの意見を聞くとか、そういうことの積み重ねの中で、徐々に理解が広まったという感じです。

篠原：生活保護費や失業対策費を減らしたからといって、田川などで、反奥田運動とかには。

岩崎：ならなかった。むしろ、田川では8対2で勝つという言葉があつたくらい、奥田層が多かった。『逆転』の中にも書いてあります。

篠原：この生活保護費は、特に、国の側も減らすような圧力をかけてますよね。実際に減らしたことによって、国政との関係が良くなったということはあるですか。

岩崎：良くなっています。全国各地から視察に来るくらいだった。

篠原：生活保護費をどうやったら減らせるか、ということですね。福岡県もそれを全国に参考にしてもらいたいというわけですね。

岩崎：だけど、県職員がその気にならなかつたら絶対できない。お役人というのは、したくないことはしない。それを、自分のこととしてやってくれたから出来た。

篠原：それは、奥田知事を守らなきゃいけない。そのためには、この仕事に着手しなくてはいけないということ。

岩崎：そうですね。それから、鶴崎県政を失った時に、そのあと、教組や県職が受けた被害は、ものすごく大きかったから、また、同じようなことになってはいけないという考え方が非常に強かったです。

篠原：奥田先生は、生活保護費や失業対策費を適正にするということは、当選する前から言っていましたよね。岩崎先生の想像になるかもしれませんが、どうして奥田先生は、このことにこだわりを持っていたのでしょうか。

岩崎：筑豊を良く知っていた。産炭地の状況を。

篠原：そうしたものがあつたから、こだわりを持っていたということなんですね。

山田：奥田先生は、もともとイギリスの福祉政策や労働運動等にお詳しい。多分、奥田先生は福祉とはこうあるべきだというイメージがあつたのでしょうか。

岩崎：あつたんでしょうね。

山田：それと、筑豊における生活保護のあり方というのは、大きく食い違っていたと理解すべきなのではないでしょうか。

岩崎：奥田さんが言いたいのは、わがままになつてはいけないということでした。

山田：保護を受ける側が、ということですね。実際、書かれている本の中でも、行政に対して依存的なものは良くないということを書かれてますよね。そこはかなり気にされていた？

岩崎：はい。ただ、それを説得する方法がなかった。当時の状況では、亀井県政がかなり強圧的だったから。

篠原：上から圧力をかけていく。

岩崎：だから、切りすぎたりしている。

篠原：必要な生活保護も切っているということですか。

岩崎：そうです。奥田はそんなことはしなかった。必要なものは出したわけだから。ただ、余分なものを削っていったら、大幅削減になった。つまり、それだけ、わがままが大きかったということが言える。

篠原：難しいのは、必要な部分と不必要な部分の見極めになると思うのですが、これは、どうやって見極めていたのですか。

岩崎：それは、県職員の努力です。現地に入って、かなり熱心に説得してくれた。現地の要求も、よく聞いてくれましたから。

山田：奥田政権第1期の時、中曽根政権で、国全体もそうでしょうし、自治体も財政赤字が問題になっていた。中曽根政権で言えば、臨調の方針で、できるだけ政府の役割を小さくする。その考えは、その後もずっと続いていくと思いますが、臨調路線とこの奥田路線というのが似ている部分があるのかなという気もするのですが。

岩崎：似てないですよ。我々は、臨調は反対だった。奥田さんも反対だった。

山田：どこが、違うのですか。

岩崎：つまり、余分に削って、余分に国民から収奪する部分をさせないと。逆に、必要な部分を出すと。そのかわりわがままは言わないと。そこの兼ね合いでした。あの頃、県職は暴力を振るわれる寸前までいったという報告が、よく私のところに上がってきていた。

篠原：生活保護費等の削減に説得にあって、暴力を振るわれる可能性があったということですか。具体的にどのような報告だったのですか。

岩崎：殴られそうになったとか。

篠原：それでも、結果的には納得してくれた？

岩崎：はい。お役人が本気になって説得した場合には、相手の状況を理解した上で、「ここは我慢してください」という切り返しが出来た。ところが、今のお役人は、住民の話を聞かないで切っていく。そういうやり方は、絶対駄目だと言った。あの時、県職はよく理解してくれた。

山田：粘り強く話し合って、当事者に理解してもらおうということですね。

篠原：この生活保護費や失業対策費の削減というのは、数値目標を立てて取り組んだのですか。

岩崎：いいえ。なかった。社会党の県議団がよく頑張ってくれた。

篠原：例えば、今年は2%削減しろと言われて、取り組んだのではない？

岩崎：そんなことはしませんでした。そんなことをしたら反対になるに決まっている。

篠原：ただ、毎年、適正化に取り組もうということだけで減っていったのですか。

岩崎：そうです。

篠原：それはすごいですね。その後の福岡県の歳出に占める生活保護費の割合を見ると、奥田政権が終わってから、若干、上がる時もある。

岩崎：そうなんです。それは熱心な説得が出来ないから。

篠原：これは、また不正受給が増えてしまったということになるのですか。

岩崎：そうかもしれないです。ただ、そこまで目立ってはないけどね。

篠原：こう見ると、また少し増えている時期もあります。

岩崎：緩めると駄目です。

篠原：常に、適正化、適正化と言っておかないと増えてしまう。福岡県は、現在でも生活保護費の額が全国で一番多い。

岩崎：特に北九州はね。

篠原：それは旧産炭地の問題。そして、行政が適正化を少し緩めると、また増えてしまうという構造が、今もあるということですね。

岩崎：だから、かなり柔軟だったし私も豪腕を振るった。県職がよく言う事を聞いてくれた。

篠原：豪腕を振るったというのは、具体的にどのようなことをされたのですか。

岩崎：例えば、自治労がストライキをやるといった時に、私は止めにいったことがあります。

山田：その時のストライキの争点は何だったのですか。

岩崎：忘れましたが、あの時、自治労は私の要請を受けてストライキを中止してくれた。だけど「岩崎さん、二度とこういうことはしないでくれ」と中止した後に言われたが、文句はなかった。

山田：止めに入った理由というのは？

岩崎：ストライキをすれば、処分が来るのはわかっている。処分をなくすために、私はやめなくてはいけないと説得した。「今、処分を受けても、いいことは何もない」と。処分受けるとお金もかかるし。

山田：その後、特に労使関係に大きなトラブルはなかったのですか。

岩崎：ありませんでした。

山田：ストをやって処分を受けるということは？

岩崎：処分は少なかったです。奥田になってから。不必要な処分がなくなっただけでも随分違うのです。亀井政権では処分をやりすぎるくらいやっていた。それがなくなっただけでも、随分違う。かなり考え方が柔軟でしょ？

山田：柔軟ですよ。逆にいうと、柔軟すぎてそれに対して組合の方から。

岩崎：それはなかった。なかったでしょ？ あの頃、特に。

山本：なかったでしょうね。

山田：労使関係が非常に良かったわけですね。

岩崎：労使関係は、良かった。

—奥田県政における労働組合—

篠原：奥田県政では労働組合も野党側だったのが、与党側になるわけですよね。これは労働組合にどのような影響を与えましたか。

岩崎：つまり、与党はどうあるべきかを考えるチャンスになった。

篠原：権力側に立った時に、たしかに考えるチャンスになりますよね。どのような？

岩崎：私は、演説で、「革命は難しい。勝つことはもっと難しい。しかし、勝った後は更に難しい。だから、頑張ろう」と言いました。

篠原：具体的にどんなことが変わっていききましたか。

岩崎：ともかく、無茶を言わなくなった。

篠原：これまで無茶を言っていたこともあったと。しかし、現実的な主張になってきたということですね。

岩崎：そうです。

篠原：具体的に、どんなことが現実的になったとかありますか。

岩崎：ともかく処分などが減ってきたから、不必要な反対闘争をしなくて済むようになった。

山田：組合活動からしても、本当に大事なところに集中できますよね。それは、組合運動にとって重要なこと。

岩崎：だから、あの時に「県民総立ち」を掲げたのは、そういう点もあった。労働組合の考え方を変えなきゃいけないということだった。県評もそう思ってたし、奥田さんも、そのように考えていました。

篠原：具体的に、労働組合の考え方や行動は変わりましたか。

岩崎：私は変わったように思いますが。

山田：この点は、改めてお聞かせいただくことになると思いますけど、全国的には労働組合の再編という流れが出てきていますよね。連合へと向かう流れ。今日は、少しだけで結構なのですが、岩崎さんは、連合のほうに行くことが非常に反対だったとおっしゃっていました。その時に、奥田県政があって、県評や社会党、共産党が与党側という環境だった。まさに全国的に見ても、特殊であった。その中で、一方、労働組合が衰退して、それではいけないということで、連合へ再編という流れがあって、そこをどうご覧になっていたのか。どのような対策をとったか。

岩崎：私は手の打ちようがなかった。労働運動全体は、全国レベルの話。産業別に右のほ

うへ持っていかれるから、そうなった時は、1 県評が何をやっても、どうしようもない。上から下に流れてくる。

山田：圧力みたいなものですか。

岩崎：そうです。

篠原：その意味では、福岡県評や福岡県の労働界は、この時期特殊な性格を持っていましたね。

岩崎：特殊な性格です。私は、かなり大きな声で反対していました。総評大会の議事を読んでみたらわかるけど、私の演説は相当強烈です。

篠原：福岡県だから、そういうことが言えるという感じになりますよね。

岩崎：そうです。だけど、仕方がなかった。全体の流れからどうしようもなかった。県評の中でも、自治労、国労、日教組の3つが崩れたら、労働運動が全部崩れる。この3つがあったから、総評運動があったし、県評運動もあった。あの時、一番最初に崩れたのは自治労だった。自治労が一番甘かった。最終的に頑張ったのが日教組。その間が国労だった。

山田：国労の場合は、JR 民営化に伴って、外的のものがあったと思いますが、自治労が先というのは？

岩崎：結局、権力に近いところが一番影響を受ける。

山田：革新政権自体は、どこも衰退しているので。その辺は、また改めてお聞かせください。

—選挙運動について—

山田：選挙運動ということで、1 期目の段階で、その次を狙って地道な活動に取り組まれていたということですが、2 期目、3 期目の選挙運動は、1 期目と比べて、どういう点で違いましたか。楽になった部分もあると思いますし、逆に困難になった部分もあると思いますが。

岩崎：2 期目は、どうってことなかったです。非常に楽勝でした。

山田：1 期目の活動の成果が出たわけですね。3 期目、特に共産党との関係が出てくると思いますが。

岩崎：あの時に、私は県評をやめました。

山田：3 期目の選挙の前ですか。

岩崎：はい。

山田：そうになると、直接、岩崎さんが陣頭指揮をやるということにはなかった？

岩崎：なかった。あの時に西鉄労組出身の事務局長が出てきて崩れてきた。

山田：そこに関しては、私も詳しくはわかりませんが、だいぶ県評が変わったんですね。

それこそ、先ほどの連合に対する態度云々が問題になった。その時に、岩崎さんのよう

な選挙運動の指揮をとる人がいなくなった？

岩崎：そうです。

山田：あと、共産党との関係は？

岩崎：うまくいかなかった。

山田：逆に言えば、岩崎先生から見た時には、自分だったら、もう少しうまく共産党との関係も作って、やれたという思いはありますか。

岩崎：それはありますね。あの時は、私は奥さんを連れて、共産党系の組織を全部挨拶して回った。

山田：それは、独自の判断で回られたのですか。

岩崎：そうです。さもないと、大変だった。選挙で負けるのが見えていた。

山田：それは、どの辺でまずいと思われたのですか。

岩崎：見てわかるよね。

山田：運動自体がバラバラなのですか。

岩崎：それぞれの単組の中でも、社会党系と共産党系が対立するような状況が次々として出てきていた。あと、熱気がなかった。選挙は熱気を失ったらもう負けです。

山田：2期目の選挙が楽だったので、油断とかがあったのでしょうか。

岩崎：それは、私の次の人の仕事だったから。緩んだ感じだった。それで、危ないと思って、社会党の方も心配して、「岩崎さん、共産党との関係を頼むよ」と言われて、私は奥さんを連れて、共産党の組織を回った。知事の日程では、本部センターに社共共闘ではない考え方の人がいたから、遊説もできない。だから、私は奥さんを連れて、全部回りました。

山田：県評の次の事務局長の方は、社共共闘に対しては？

岩崎：消極的だった。

山田：県評の事務局長が変わったことによって、従来の社共共闘というスタンスを取るといふ発想がなくなった？

岩崎：なくなった。

山田：社会党の側からして見れば、どうだったのですか。

岩崎：当時は、もう社会党は力がなくなってきていたから。社公政権時代だから。

山田：そういう時期ですね。

岩崎：社公構想が表に出てきた時代。自治労、国労、教組という御三家の力が弱くなったから、総評と一緒に社会党の力も弱くなった。

篠原：奥田八二氏自身について、お聞きしたいのですが、1期目の時は岩崎先生が口説いて擁立したわけですね。2期目、3期目は、奥田先生自身は、どのようなスタンスだったのですか。

岩崎：2期目はやる気だったよね。3期目は、社会党県議団が一番熱心だった。3期目もや

りたいと。

篠原：奥田先生自身もその気になった？

岩崎：はい。

篠原：現職知事が再選を狙うことになるのですが、この選挙というのはやりやすいですか。

岩崎：「現職10万」という言葉がある。

篠原：現職は10万の票を持っているということですか。

岩崎：10万ぐらいの差があるということです。

篠原：だから、現職有利ということですね。

岩崎：選挙は、絶対、現職有利です。

篠原：具体的に、どのような点で有利さを感じますか。

岩崎：日常活動ができる。

篠原：公務が選挙運動になる。

岩崎：だから、1期目の奥田にそれをしてもらいたかった。

篠原：だからこそ、県産品愛用運動とかやっていたわけですね。

岩崎：泊まるとかね。

山田：公的に言えば、県民の会の幹事会で奥田知事と定期的に会うということですけど、プライベートで奥田知事に会って、具体的に話をするということはありましたか。

岩崎：学者・文化人の会に私が入って、月に1回、食事会をやっていました。

山田：学者・文化人の会は、まだ継続していたのですか。

岩崎：ずっと続いていた。県民の会の代表委員会が、学者・文化人の会みたいなものだったから。具島さんが頭で。

山田：2回目の選挙の時には特に問題がなく、3回目の選挙の時に。

岩崎：それも少し崩れた。学者さんたちの熱意もなくなった。

山田：熱意がなくなったというのは、どういうことですか。ある意味、日常化したからなのですか。

岩崎：そうではなくて、県評と学者・文化人の考え方の差がはっきりしてきた。私は大学出てマスコミでしょ。先生方とは出演者として、NHKでの付き合いがある。いろいろな意味での輪があった。

山田：学者・文化人の会の方々の発想は良く理解されていたということですね。

岩崎：そうですね。

山田：一方で県評の方は、そうではなかった？

岩崎：なかったです。昔の労働組合に戻ってしまったから。

篠原：それは、だんだんと対立してきたから？

岩崎：対立はしてない。

篠原：見解の相違が出てきた？

岩崎：そうですね。あと、距離が遠くなった。電話 1 本で「頼みます」「はい、分かった」という関係ではなくなった。

篠原：そちらが権力を持つと、だんだんと上下関係が出来てくるということですね。

岩崎：松田さん（松田留吉氏）の時には、学者文化人の会での付き合いは、ほとんどなかったのでは？

山本：全国的に潮流として、労働組合が右翼中心の再編の流れの中で、民間先行で、民間だけは連合の形で、西鉄労組の労働会館に事務局を作っていた。結局、県評傘下の労働組合もひっくるめて、全体的には右に流れていく時代の中で、奥田さん自身が大きな支柱であった労働界がそのような状況になったので、口で言われたかどうかは知りませんが、3 期目はあまり快く思っていなかったのではないかと。

岩崎：3 期目は、あまり快く思っていなかったね。林タケちゃん（林武彦氏）などは熱心だった。

山本：先ほど言われたように、県議団の方が熱心であって、労働界ひっくるめて奥田さんも、そんなに積極的に 3 期目をやりたいという気持ちはなかったのではないかと。その途中に、連合福岡が出来て、県評センターという形で、確か 3 期目は選挙運動をやっていると思います。連合に行けない課題を少しお互い煮詰めるということで、県評センター、向こうは友愛会議を作って、政治の問題や人権の解放同盟の問題とかあったと思いますけど。

岩崎：政治活動はしないというのが、友愛会議の方針だった。

山本：その時に 3 期目は、連合の方にも奥田さんの選挙の要請に行っています。

岩崎：一緒にやってくださいと。

山本：鉄鋼とかに行っている。本気でどこまでやられたかは知りませんが、やりましょうという形でのっかかってきた。

岩崎：推薦だけしたかった。

山本：選挙の形は、また違う意味での県民党みたいなものでした。当時、県庁の出納長をしていた池田さんが、「山本くん、ここまできたら、社共で県民党はおかしいじゃないか。すべての政党を交えて作るのが、本当のあなたたちが言う県民党ではないか」と。自民党さんは自民党さんで、攻勢をかけてきたというのがありますから。労働界の右への流れの潮流を一番把握されていたのは、奥田さんだったように思います。岩崎さんたちが作ってきた流れで、奥田さんをどうかしてやりたいという気持ちと。一番複雑な状況の中での 3 期だったので、林武彦さん含めて県議団の方が前に出て、「奥田さん、3 期目もやってくれ」という気持ちが強くなったのではないかと。

岩崎：あの時は、まさにそうだったね。

篠原：奥田政権期とは、少し時代がずれるかもしれませんが、全国的に革新自治体が出来ましたよね。北海道でも横路さんが知事になったりなど。そういった革新自治体との協

力や情報交換はありましたか？

岩崎：あったけど、横浜は一度話を聞きに来たが、「あなたのところの方が進んでるな」と言われた。県評がずっと選挙資金を貯めてきた。そういうことをやっていたら、向こうがびっくりして、「そんなことをやっていたら、県評がすっ飛ばすのではないか」と言われたこともあった。

篠原：むしろ、福岡県が他の革新自治体から学んだことは、あまりない感じですか。

岩崎：なかった。飛鳥田さんのところに学びに行っただけでも、逆に、「あなたのところの方が進んでいると言われた。

篠原：社会党の党本部から、何か要求とかは来るのですか。

岩崎：全くないです。

篠原：例えばお願いという形でもないのですか。

岩崎：ないです。

篠原：交流もない？

岩崎：交流はありました。

篠原：どんな交流ですか。

岩崎：選挙の時に車に乗ってくれるのは、社会党の国会議員だった。

篠原：国政選挙において、社会党を応援することもあったのですか。

岩崎：もちろん。県評は最大の支援団体だから。

篠原：政策的なものについて、社会党の委員長と奥田先生が協議するということは？

岩崎：なかったです。

篠原：もっと言えば、奥田先生を国会議員や大臣などに起用するような話もなかったですか。

岩崎：なかったです。やっぱり県は県だという考えだったから。

篠原：当時、革新自治体が社会党系で多くなった時に、この勢いを持って、国政でも社会党の政権や、社公民のような連合政権論とかあったと思いますが、そのような流れは？

岩崎：あまりはっきりしなかった。当時、社会党は、かなり力が落ちてた。そういうのがあってくれたら良かったけどね。残念ながらなかった。

山田：3期目の選挙が、2期目とだいぶ変わって、しかも違う意味での「オール県民」的な3期目となったわけですが、そこで県政の中に変化は表れましたか。

岩崎：県評との話し合いなど、そういうものはほとんどなくなったよね。知事との間で。

山田：従来の定期的に会合とかはなく、ということですね。

篠原：ということは、4選目というのは、早い段階で諦めていたのですか。

岩崎：そうですね。

篠原：3選目に当選して、次、4年後にまた行くぞということには、ならなかった？

岩崎：ならなかった。

山本：3期目に、岩崎さんたちが引かれた。労働界が解散、右のように流れて、総評社会党というのは裏表ですからね。お金の問題もひっくるめて。労働界が解散すれば、社会党も分解するという状況で、ずっときていたので、社会党と昔でいう総評の流れというのは、3期目の時にかなり弱体化していた。もう、ないわけです。そこで県議団が前に出たというのは、また色々、政治的な背景があるのかもしれないですが、4期目も県議団の方は、奥田で行きたいという気持ちは持っていた。その時に奥田さんが、「傀儡」という言葉を使った。自分は、彼らの言うことばかり聞いて、祀られたような形で知事はしたくないと。その弱音を言わせる部分として、体を壊していました。肝臓が悪かった。病院に入られていた。

岩崎：でも、やはり県評がなくなったことが一番大きかった。

山本：どちらかというと、社会党の県議団が前に出た形での県政運営に変わってきたので、奥田さんは名前だけという感じだった。極論ですけれども。県政が3期目の終わりぐらいから、労働界の衰退と同時に、そのような勢力が出てきて、奥田さんとの関係も変わってきた。

岩崎：当時、「林武彦知事」という話さえありました。

山本：そういう形で権益の形が変わってくれば、そういう人たちは4期目もやりたい。そのように言われたこともある。「武田信玄の映画を見たことがあるか」とタケちゃん（林武彦氏）から言われた。奥田さんは小さいから、知事室で後ろ向いて座ってたら、背もたれに隠れる。体は悪くても死ぬまでさせると。極端にいうと、後ろを向かせていたら、奥田がいるか、いないかわからないというような言い方を林さんがされたことがある。なぜ、強引におろさないといけないのかと。お前ら説得しろと。あの頃、奥田さんが嫌と言ってるのが見えるような態度をされていたかもしれない。

山田：僕の中のイメージでは、逆に、従来、支持基盤がなかった中で、奥田氏の権力基盤が固まって、むしろ社会党などの与党に対して強く出れると思っていたが、今の話を聞くと、逆に、3期目は与党がかなり強くなってきたわけですね。

山本：その辺は、岩崎さんも理解されていると思います。

岩崎：私をやめさせたいというのは、民労協の意向としてはかなり強かったです。

山本：西鉄労組というのが、岩崎さんの後に出ましたが、県議団のキャップも西鉄労組の方だった。仲が悪いようだけど、裏では組みながら、岩崎を落とせば労働界だけではなく、県政の方も西鉄労組の方に回ってくると。西鉄労組という言葉は、ちょっと悪いかもしれませんが。県議団のキャップは、西鉄中心だった。

山田：さっきの林武彦さんが西鉄労組？

山本：そうです。西鉄の労働組合から出た。

山田：同じ社会党でも、割ってみると違うわけですね？

岩崎：一番右だった。林武彦さんは、やっぱり、単産が右だと右になるよね、議員も。

山田：出身母体の影響を受けるんですね。

岩崎：だから、企業内組合というのは駄目だというのは、その辺もある。

篠原：そういう状況も、奥田先生は知っていた？

山本：知っていたでしょうね。林武彦さんなりの考え方の県民党ですよ。自民党あたりをひっくるめた。奥田さんは、自分は知事として何をしているかと思って、「傀儡」という言葉がぼろっと出たのかもしれませんが。これだったら、やっても仕方がないかなという考えに急速になっていったのではないかな。

山田：その後、麻生渡氏になりますよね。そこは、禅譲みたいな形で、話がついていたということですか。

岩崎：だと思います。

山田：それは、当時、与党側の社会党も……。

岩崎：むしろ、社会党の方が持ちかけたのではないかな。つまり、選挙が楽な方がいいから。

山田：自分がそこに乗っかればいいわけですよ。

山本：結局、最後の辺は、岩崎さんよりも私の方が現場にいたのですが、奥田さんの4期目をしなさいと言いながら、裏では先ほど言った麻生渡をいかに自分のところで抱え込むかということで、奥田県政の継承者ということで、県議団は麻生さんを推した。ただ、自民党は原点に戻れば、革新の奥田よりも麻生の方がいいということで、県議団の方で回されて、あの時は社会党も新進党などたくさんあった時代。日本新党とか新進党とか、ごたごたしていた時代です。

岩崎：ともかく、総評が崩れたのが非常に大きかった。それで、県評も崩れたわけだし。総評、県評が崩れれば、社会党も崩れる。まんまとやられたという感じがした。

—奥田県政とその後の福岡県政—

篠原：奥田先生の後には、麻生、小川と知事が変わっていきますが、奥田先生後の福岡県政と比べて、奥田県政の評価できるどころ、特徴は何ですか。

岩崎：自民党のいいなりには、ならなかったということじゃないかな。

篠原：逆に、奥田県政で評価できない点はありますか。

岩崎：県議会の与党が弱かったから、力が発揮できなかった。

山田：本来、奥田さんが県知事になったら、これをやりたいというのがあったと思いますが、実際、議会の中でやれなかったことは何ですか。

岩崎：まずは、女性副知事。

山田：それは、自民党の反対でできなかった？

岩崎：反対することがわかっていたから、出さなかった。女性を出して引っ込めたらご本人に傷がつく。それはできないと思った。

山田：変な質問になりますが、なぜ自民党はそうだったのですか。

岩崎：何でも反対だった。奥田知事のすることが、1期目は何でも反対だった。

山田：次第に関係は良くなっていきますよね。それでも、できなかったわけですよね。それはなぜですか。

岩崎：女性副知事を作ったら、さらに評判が良くなるから。

篠原：しかし、反対するのも、また自民党の評価が下がる気がするのですが。

岩崎：あの頃、奥田、社会党、県評に反対なら、自民党は何でもよかった。

篠原：賛成するわけにはいかないと。

岩崎：ただ、候補を出してつぶれたら、奥田さんの評価も下がるし、出してもらった人にもすごい迷惑がかかる。

山田：だから、反対しようと思えば、理由はいくらでも挙げられるわけですね。理由を挙げて、つぶされる可能性がある。他に、女性の副知事以外で、これはしたかったけど、断念せざるを得なかったことはありますか。

岩崎：あまりなかったのではない。高教組の主任制試験反対というのはかなり緩和した。日教組が主任制反対をやった。あの様なことでの差別は、亀井時代よりは、ずっと緩和されたと思う。ただ、あの時、大塚（大塚和弘・県評事務局次長）が気に入らなかったのが、「奥田はあと4年あるんだから、今のうちに主任制には賛成しろ」と言った。一点張りだった。「今、主任制にしてしまえば、4年も経ったら、教育委員会だって変わる」と私は言った。その4年という時間が待てなかった。断固、断固だった。

山田：座談会のところで、主任制をめぐる話が書かれていますね。

篠原：岩崎先生にとって、心残りの点はありますか。

岩崎：やはり、主任制問題でした。

山田：主任制反対という形でやった結果、折り合いがつかなかったという理解でよろしいのですか。

岩崎：教育委員会も、まだ自民党の影響が強かったから、知事の思うようにはならなかった。だから、どうしても県議会で社共が過半数を取りたかった。かなり努力したけど、うまくいかなかった。時間もなかった。その間に、渡辺四郎を参議院議員にした。

山田：それは、どういうことですか。

岩崎：渡辺四郎さんという人が自治労の委員長だった。彼が参議院に出たいと。ところが、周りがみんな反対だった。それを、私が説得して参議院議員にした。選挙に勝った。この時に、公明党が落ちた。自民党が二人と、社会党が一人。私は公明党というのは、選挙の上では、あまり怖いと思っていない。あの票は固い。固いけれども、伸びがない。あそこを上回ればいい。ただ、自民党とくっついた時には強い。あの時、社会党1、自民党2、公明党1という4人で選挙になった。最初から、公明党を落とせばいいと思っていたから、公明党を上回るには、どうしたらいいかということだけで票読みしていて、結

果的にそうなった。読売の記者が私のところにきて、票読みを聞かせてくれというので、聞かせたら、「公明党は絶対強いですよ」と言うので、「そうかなあ。俺は足りないと思う」と言ったら、あとで社会党の記者が、「岩崎さんの通りだった」と言った。公明党は伸びがない。ところが、今は、公明党は絶対当選という思い込みがある。絶対違う。票に限りがある。それを、どう上回るかということで票読みをしていけば、選挙は勝てると思います。あれは、今吉のお父さんが、私によく教えてくれた。

山田：今吉のお父さんとは？

岩崎：今吉正文さんといって、社会党の組織部長（社会党福岡県本部国民運動部長）がいた。この人は、評判はよくなかったが、私にとってはいい先生だった。随分、選挙のことを教わりました。

山本：奥さんも活動家でしたね。市川房枝さんたちの流れ。結構、年齢もいかれてましたけどね。

岩崎：マサエさん（今吉氏の奥様である今吉マサエ・県評主婦の会会長）から、「岩さん、うちのお父ちゃん、ありがとう」とよく言われた。月に1度、必ずご飯を食べていた。

山田：評判が悪いというのは、どういう点で悪かったのですか。

岩崎：本当のことを言いすぎる。すごく皮肉に聞こえる。

山田：今日は、この辺で。ありがとうございました。

（第3回聞き取り 終）

第4回（2016年5月28日）

—労働戦線の統一について—

篠原：連合の結成という労働戦線の統一について、いつ頃、どこから、どのような形でお聞きになったのかをお教えてください。また、当時、主導的立場であった人物や団体等についてもお聞かせください。

岩崎：福岡は、比較的、労線問題についての情報は早かった。

山田：それは、いつぐらいからですか。

岩崎：私が県評の事務局長になった頃に、全通と全福郵労の問題が起きた。全福郵労というのは、全通の方針に反対した福岡郵便局の組織。そこが、全通から除名された。

篠原：なぜ、対立したのですか。

岩崎：全通が右寄りなので、それに反発した。

篠原：それで、除名を全通からされるということですか。

岩崎：はい。全福郵労は、「全福岡郵便局労働組合」という名前で、独自の運動を始めた。

経費稼ぎに、塩鮭の販売をしたりして稼ぎ、結構儲けた。私は、毎年、それを買っていました。その頃から労線の動きは始まっていたということです。

山田：今の話だと、事務局長になられたのは、1975年？

岩崎：はい。その頃には。

山田：80年代以前に、そういう動きがあったということですか。

岩崎：はい。

山本：中央では、全通の宝樹が委員長だった。あの辺の動きとの連動でしょうね。

山田：一般的には、労働戦線の統一は、民間先行型と言われていますが、今のお話から聞くと、官公労が先行していたのですか。

岩崎：先行ではなくて、民間の方から働きかけを受けて、全通や電通は比較的早い段階から右寄りだった。

篠原：どうして、民間からの働きかけを受けて右寄りになっていったのですか。

岩崎：傘下の労働組合の中に独自の運動が始まっていたから、それを潰すということだったんでしょね。

篠原：それが1970年代からあったということですね。当時は、まだ、それほど大きな流れには、まだなっていなかった？

岩崎：なっていないです。

篠原：反対もあったわけですか。

岩崎：ありました。

篠原：どういう団体が反対されていたのですか。

岩崎：共産党系の組織が、特に反対だった。民間中小は早くから神経質になっていました。

それから、私が所属していた太田派の太田薫さんは、かなり早い段階から気にかけていて、私が総評大会に行く度に、全専売にあった社会主義協会の太田の事務所に必ず寄って、話を聞いていました。

山田：太田薫さん自身は、民間主導の労働戦線の統一に関して、どういう点に警戒されていたのですか。

岩崎：まず、地区労や県評という地域組織がなくなる。それがなくなったら、中小の労働組合などが戦いを始めた時に、支援するものがいなくなる。その辺が一番、心配の元だった。

山田：そう考えると、労働組合自体からすると、全国に統一するというのは、労働運動として……。

岩崎：むしろ、逆行だと思っていました。

山田：逆に地域における活動は、むしろ、力を失うのではないかと。

岩崎：そうです。太田派は、どちらかというと、奥田さんも早い段階で「地区労運動とは何か。地区労運動のような組織があるから、労働組合は元気なのだ」ということを盛ん

に言って、そういう点での指導は強めていた。

山田：『県評三十八年史』をきちんと読んだわけではないのですが、地区労をどうするのかというのが、一つの議論の焦点だった。改めて、地区労という活動が、どういうものであり、県評との関係がどうだったのかということをお教えいただきたい。

岩崎：まず、県評と地区労は、上下関係はありません。ただ、地区労は、総評系の組織の、地方の組織が中心。私が所属していた日放労もそうだったけど、総評に加わっていったところは、地区労から必ず働きかけがあって参加していた。だから、総評が中心なのです。

山田：とはいえ、県評とは独立した組織ですよ。

岩崎：だから、県評に2つ名前があった。熊本などは、県総評。つまり、総評の下部機関だということを謳った。福岡の場合は、県労働組合評議会で、総評の下請けではないという考え方を持った組織だった。

山田：それとは別に、今、地区労があって、地区労は、総評系の組合が入っているけれども。

岩崎：分会組織ですね。地方分会が入っている。

山田：共産党系の組織も入っているわけですか。

岩崎：共産党系の組織も、もちろん入っていました。

山田：その時に、運動する場合においては、県評と地区労が共闘して運動を行うということとは？

岩崎：当然、ありました。私が事務局長になってからは、毎年の県評の総括には、必ず、全地区労の1年の運動総括を、県評の運動方針の中に必ず載せました。

山田：指導部の人員的には、地区労と県評の重複というのはあるのですか。

岩崎：あまりありませんでした。

山田：岩崎さんご自身は、経歴からすると地区労……。

岩崎：私は地区労の議長をやめて、日放労の中央の役員になるはずだったが、その時に福岡県評の議長がいなくて、ぜひ議長をしてくれと言われた。それで、私は日放労の中央に上がるのを諦めて、地方の組織の運動に残ったわけです。

山田：そこは、少し話があれかもしれませんが、ご本人としては、日放労の中央に行った方が。

岩崎：行った方が、楽だった。

山田：それを、なぜ、敢えて福岡の県評の方に？

岩崎：そういう地域組織を大事にしていかないと、労働運動全体が駄目になるという考え方は私の中にありました。

山田：ナショナルセンターを強くして、それでやるというよりは、労働運動というのは地域に根ざして。

岩崎：地域の一番下の段階から繋がりを持って運動した方がいいという考え方でした。

山田：それは、太田薫さんも考え方は非常に近い？

岩崎：地区労組織を大事にするというのは、奥田さんなどが一番強かった。『地区労運動とは何か』という本を出されていて、よく読みました。労働組合というのは、産業別の組織ではなく、単産組織だから、どうしても経営側とのつながりが深くなってしまふ。それを、どこかで歯止めをかけるとすれば、地域運動だという考え方です。

山田：逆に言えば、産業別組合という組織が、日本の現状においては、簡単にできるわけではない？

岩崎：ないです。

山田：だったら、地域の方で共闘してやる方が現実的であるという発想ということですね。

岩崎：そうですね。

山田：それで、奥田先生も同じようなことを考えていたということですね。

岩崎：はい。

山田：最初、全通と全福郵労の対立があつて、実際に大きな流れとして、労働戦線の統一が上がってきますよね。具体的に、県評の中で論議されるようになったのは、いつ頃からですか。

岩崎：その辺が、よく覚えてないんです。

山田：『三十八年史』の定期大会の部分だけしか見ていませんが、85年の38回定期大会では、大きく議論には出てなくて、その次の、86年から具体的な言及がされて、決定的には40回大会からです。このあたりで、大会レベルで出てきたということは、それ以前に、水面下で動きがあったということだと思いますが。

岩崎：官公労系が、動きが早かったです。全通、全電通。それと民間。だから、宝樹、山岸だった。

篠原：非常に有名な二人だと思いますが、彼らが福岡県に対して直接来たということは？

岩崎：ないです。

篠原：呼びかけに応じた感じですか。

岩崎：そうですね。

山田：福岡の県評組織の中で、早い段階で連合に至る流れに動いていったのは、大体どの辺なのですか。

岩崎：中立労連系だった。食品労連とか、電機労連とか。

篠原：民間ですよ。

岩崎：民間です。

篠原：彼らはどうして賛成になった？

岩崎：総評に対する不満だろうね。つまり中連というのは、総評の付属組織みたいなものだったから、運動の独自性ということから言えば、「もう少し自分たちのことを考えてく

れてもいいのではないか」ということがあったのではないか。

篠原：不満が溜まっていたと？

岩崎：そうです。

山田：総評もそうでしょうし、県評も基本的には、官公労中心でやっていったと。

岩崎：官公労中心ということに対して、民間の不満があったことも事実です。

山田：思い出される範囲で結構なのですが、例えば、どういう部分での対立だったのか。

単に、官公労が中心になってやっているというだけではなく、具体的な問題をめぐる対立があったのですか。

岩崎：いいえ。あまりなかったです。県評がまだ1本だった頃、あるいは、地区労が1本だった頃には、あまりそういうことは、お互いに言わなかったです。むしろ、一緒に運動していこうという考えの方が強かったです。

篠原：それが、だんだんとばらばらになってくるのは、いつからですか？

岩崎：85年くらいからです。

篠原：その背景にあったものは何ですか。一枚岩でなくなってきた理由というのは？

岩崎：ひとつは、国鉄、国労の分裂がありました。それから、自治労あたりが、いつのまにか労線統一の賛成の方に回った。

山田：この前、お話を聞かせていただいた時にも、その話になった時に、自治労が早い段階で変わったと。その時に、岩崎さんは、自治労というのは、ある意味、権力に近いから、変わりやすかったと、確かおっしゃられたが、そういう見立てでよろしいのですか。

岩崎：いいと思います。

山田：自治労がいつのまにか変わっていったと？

岩崎：はい。

篠原：逆に、この連合の結成に反対した団体は、どのようなところですか。

岩崎：国労は、反対だった。それから、太田さんもいたから、同じ民間でも、合化労連は最後の方まで頑張っていた。合化の副委員長だった立花銀三さんが、太田さんを裏切った形になる。

山田：今の話は中央レベルの話ですか。

岩崎：そうです。

山田：裏切ったというのは、どういう？

岩崎：民間主導の方に移ってしまった。

山田：合化労連の中でも、割れてしまったということですか。

岩崎：そうです。その頃、山本くんが県評に来た。

山本：ちょうど、合化労連分裂の頃でした。太田さんが『春闘の終焉』という本を書かれています。あれを、いつか持ってきますので、読んでいただければいいと思います。太田さんの考え方が結構出ています。

岩崎：あれは、いい本だったね。

篠原：次に、岩崎先生自体のお考えをお聞きしたいのですが、岩崎先生は、労線統一には基本的には批判的だった？

岩崎：反対だった。確か85年くらいに、県評の大会の時に、労線統一反対のパンフレットを作っています。

篠原：そのパンフレットには、どういう主張を書かれたのですか。

岩崎：「なぜ、労働戦線統一は駄目なのか」ということを書いた。

山田：その主張というのは、地区における労働運動が駄目になる。

岩崎：ということよりも、産別組織がない中で、企業別組合の傾向が、もっと強まるということが、私の考えの中心だった。企業別組合というのは、どうしても企業の考え方に近づく。

篠原：それでは、自主性がなくなる？

岩崎：なくなる。労働組合としての自主性がなくなる。

篠原：一方で、日本の中央レベルの労働組合というと、総評があり、同盟があり、中立労連があり、ばらばら感があるわけですよ。これについては、そのままで良かったという考えなのですか。

岩崎：私は、そのままで良かったと思っている。

篠原：特に、統一する必要はないと？

岩崎：はい。

篠原：その時期は、総評がだんだん強くなってきていたと？

岩崎：そうです。だから、80年代、春闘を始めた頃から強くなる。そして、中立労連も総評と一緒に戦うようになり、未組織も、県評や地区労に、どんどん加盟するようになっていった。だから、70年代半ばから80年代にかけては、総評も県評も全部、組織が増えています。

篠原：だからこそ、連合の結成のような労働戦線の統一には反対であった？

岩崎：反対だった。

篠原：今、岩崎先生がおっしゃったことは、福岡県だからこそその考えであるような気がします。

岩崎：それは、その通りですね。しかし、九州の県評は全部反対だった。

篠原：県評レベルでは反対だったということですね。全国的には、どうなのですか。

岩崎：全国的には、中央単産が崩れていくわけだから、そこが崩れれば、企業別組合の悪いところが出て、上から言われたら、どうしても従わざるを得なくなる。組合費も中央1本の会計だし、色々な面で糧道を断たれてしまう。

篠原：今、おっしゃられた全国レベルの認識というのがあって、一方で、岩崎先生は、福岡のこともご存じである。そうすると、岩崎先生は、福岡だけで、あるいは九州だけで

反対しても、この流れは止めることはできないと思っていたわけですね。そうすると、現実的な落としどころは、どういうところに持って行こうと考えておられたのですか。

岩崎：持っていく力がなかった。単産の上が変わったら、下は駄目です。

篠原：岩崎先生自体が、何か反対運動を作っていくということはされなかった？

岩崎：できなかったですね。自分だけの力では。

山田：九州の他の県評も反対だったということは、九州内だけで共闘して作るということ
は？

岩崎：本当はすべきことだったと思う。しかし、私の力ではできなかった。

山田：他に、「九州は別で」ということを、おっしゃっている方はいらっしゃいましたか。

岩崎：長崎などは、そういう考え方でした。

山田：長崎県評の方は、九州独自でやろうと。

岩崎：はい。

山田：それは、今から見ると、非常にユニークな意見ですが、当時は、どのように受け止められたのですか。

岩崎：所詮、上から言われれば、変わってしまう。県評もそうだけど、全部、単産別に入っているから、上から言われたら、下は弱い。最後のところでは、とてもじゃないけど、力がないと思っていた。

山田：運動するときには、地域でまとまるというのは非常に有効だけれども、組織論という点で言えば、単産が中心になっていくとすると、その部分で、上には逆らえないと？

岩崎：逆らえないです。

山田：それは民間もそうだと思いますが、官公労系も同じだと理解していいのですか。

岩崎：同じです。だから、自治労も上から崩れた。あの頃、総評の中心だった人たちは比較的早く気がついて、水割りでもいいから、飲める酒である方がいいのではないかという言い方をしていました。

山田：水割りでもいいから、飲める酒？

岩崎：要するに、大きくなった方がいいと。薄くなるかもしれないけれども、大きくなることで力が強くなるという考え方。

山田：それは、今から見るとどうですか。

岩崎：早い段階で気がつけば良かったですけども、私もそうだったし、太田さんもそうだったんだけど、総評というのは、もう少し左ばねが効くと思っていた。

篠原：ところが、実際は？

岩崎：そうではなかった。75年ぐらいに、社公の政権協議が行われる。

篠原：連合政権構想がありましたね。だけれども、左ばねは効かなかった？

岩崎：効かなかったです。だから、総評大会の中で、私は頑張って左ばねを効かすようにしたし、太田さんも、その考え方だったから、県評大会の時には、太田事務所に必ず寄

っていた。しかし、崩れる時は早い。

—福岡の労働界の反応—

篠原：確認になるのですが、福岡県内においても、もともと賛成という団体は、そんなに多くない？

岩崎：多くなかったです。

篠原：しかし、上からの方針が示されると、従わざるをえなくなったということですか。

岩崎：はい。私鉄総連などは、そうでした。

山田：ちょうど連合へと移行する段階で、県評の議長と事務局長が変わりますよね。長らく、岩崎さんが事務局長をされていて、議長は自治労の方、国労の方、いわゆる官公労系だったのが、事務局長は西鉄出身の方に変わり、議長も全国金属の民間の人になっていますよね。これは、労働戦線統一という流れと関わりがあるのですか。

岩崎：関わりはあります。

山田：それは、どういう点で？この人事は、一般的にどのように決めていくのですか。選挙ですか。

岩崎：選挙です。

山田：変わっていったという時には、当然、投票で選ばれる？

岩崎：そうですね。

山田：両方とも、民間労組出身というのは、非常に珍しいことですか。

岩崎：いいえ。あの頃は私が辞めたから、それしか、いなかった。二人とも、県評の事務局長だった。

山田：事務局長が変わられるので、その後、自然に考えれば、上に上がっていく。

篠原：この坂本様と松田様は、連合の結成については、どういう考えだったのですか。

岩崎：坂本は、必ずしも賛成ではなかった。

篠原：坂本さんは全国金属の方ですね。

岩崎：そうですね。小単産だから、あんまり前に出ると、ろくなことがないと知っていた。

松田君も私鉄総連だから、上から言われたら仕方がない。

篠原：議長よりも、事務局長の方が上なんですよ。

岩崎：力は、事務局長の方が上。

篠原：ということは、松田事務局長は福岡県においても、連合の結成を進めていく動きをするわけですよ。県評は、全員が彼に従うようになったのですか。

岩崎：反対する者もあったけど、結局、駄目だった。それから、松田君がなる直前ぐらいに、私に対しては、官公労の方も私を下ろしたいというのが、随分あった。

篠原：官公労が、岩崎先生を下ろしたいと？

岩崎：はい。

篠原：下ろすということは、岩崎先生は、この頃すでに事務局長ではない？

岩崎：事務局長です。教組は、私に対して、いい感情を持っていなかった。でも、後になつたら、「岩崎君がいたら、こんなに労線統一は早くなかった」と教組の役員に言われたことはあった。

篠原：つまり、教組も労線統一に反対だったわけですね。にもかかわらず、労線統一に反対していた岩崎先生を下ろそうとしていたということは？

岩崎：太田派が嫌いだったということかな。教組は向坂派が強かったからね。

山田：労線統一とは別の理由から、下ろそうと？

岩崎：そうですね。結局、弱いところ、弱いところに釘を打たれた感じがするよ。

篠原：そのほかに、岩崎先生に批判的な団体というのは、どういう団体だったのですか。

岩崎：あの頃は、教組、それから、西鉄労組とか。

山田：西鉄は、大きな流れの中で言えば、いいか悪いかは別として、理解はしやすいですけど、県評の中においても、労線統一の問題が確かに重要な論点だったと思うが、それとは別に、協会内の……。

岩崎：ひとつは、国労が分裂したのが非常に大きかった。

山田：そう考えると、国鉄解体というのは。

岩崎：大変大きかった。

山田：逆に言えば、中曽根政権による国鉄解体、国労潰しと言われますけど、それがあつたゆえに、労線統一というのが加速化したという見方も可能なのですか。

岩崎：実際、加速化しました。

山田：もともと、民間主導だったのが、それに官公労系も乗っていったというのは……。

岩崎：国労の分裂は非常に問題でした。

篠原：それ自体は、中曽根政権の戦略だった。

岩崎：総評そのものを崩そうというものだから。

篠原：そういうものを聞くと、当時から、それは分かっていたような気がするんですよ。見え見えの戦略だったと思う。

岩崎：私は、見え見えの戦略だと随分言ったが、そうならなかった。一つは、私が小単産の出だったから。だって、考えてごらん下さい。県評なんて、みんな、千とか万の単位の組織の組合ばかりなのに、日放労は、たった300ぐらいの小単産だから。

山田：逆に言えば、以前、話を伺った時に、小単産出身であったが故に、事務局長としての役回りが出来たという見方もあったと思いますが、そういう状況になった時には。

岩崎：非常に弱かった。県評の組合費のうち、300ぐらいだったら、10分の1にもならない。

山田：こういう場においては、大きな組織の方が、力が発揮出来るということですね。

篠原：少し理解しにくいところがあるのですが、福岡の労働界や労働組合は、それこそ90

年代になっても、奥田先生を知事にするくらいの力があつたわけですね。

岩崎：私が、まだ事務局長の頃はね。

篠原：福岡県は全国的に見ても特殊で、元気というか活力のある労働組合を持っていたと思いますが、一方で、連合の結成の問題については弱さを感じる。福岡の労働界は、強さと弱さが共存しているような気がするのですが、その強さと弱さの両方あるのが理解しにくい。

岩崎：ひとつは、太田派を向坂派の対立が、ずっと尾を引いていたことがある。山本君は、見ていてどう思った？ いなかったか？

山本：もう福岡に来ていましたけど、言われているように共存していたかもしれませんが、岩崎さんや奥田さんが言われるように、横での運動、地域を中心とする運動を基盤とする戦線統一を目指していた部分と、縦一本で右も左も一緒になるんだという部分が、離れていた部分があるのではないか。

岩崎：あるね。

山田：だから、福岡県でどうか出来るという部分に関しては、横の繋がりで力を発揮するけれども。

岩崎：だから、奥田選挙ができたということは、地区労や県評があつたから。

山田：しかし、このような全国レベルの問題になると、ある意味、上から崩されていって、横の繋がりが崩れるということ。

岩崎：そうです。

篠原：逆に、地域とか地区で活動していた人たちは、あまり全国の労働組合の動向に関心がなかったのですか。

岩崎：そんなことはなかつただろうけど、総評と県評があるから安心していた。ところが、総評もなくなる、県評もなくなるという状況では、どうしようもない。

山田：『県評三十八年史』を拝見していますと、いくつかの組織が、大会の中で社会党を支持するということに対して異議を唱えているということがありますよね。

岩崎：それは、私が議長になった頃から、ずっとそうです。共産党系です。

山田：そうですよね。それで、42回臨時大会、89年3月。ここで、福岡県医療労働組合連合会、全日自労、建設一般、この辺りが、まとめて8組合が抜けていくわけですね。

岩崎：いいえ。抜けていかない。

山田：最後まで、残るわけですか。

岩崎：残ります。

山田：連合の方に？

岩崎：いえ。県評がなくなつたから、連合に行った。県評があれば、彼らは連合には行かなかつた。

山田：最終的には、全労連系の方に流れていきますよね？

岩崎：はい。

山田：ここは、共産党系の立場を代表する組合だったということですね。

岩崎：はい。

山田：これらの組合自体の存在が、県評から連合へという時に、影響力はあったのですか。

岩崎：あまりなかった。

山田：毎回、大会では、このように言うけれども、実際の動きの中では、影響力は特になかったということですね。

岩崎：はい。ただ、奥田選挙を通してみれば、私が社共共闘だったから、かなり県評を信頼してくれていた。

—奥田氏は連合をどう捉えたか—

篠原：奥田先生についてお聞きしたいのですが、奥田先生はもちろん、労働組合論の専門家ですから、労線統一は？

岩崎：賛成ではなかったです。

山本：難しいところですね。

篠原：福岡は、非常におもしろいところがありますね。

山本：非常にもろい。ばたばたと崩れていくから。

篠原：この時期に両立するのは非常に珍しい。北海道と福岡ぐらいです。ですが、ガタガタと崩れる弱さもあるという。

岩崎：奥田選挙が最後の花だったな。

篠原：3回目の選挙の時？

岩崎：3回目の選挙の時は、もう社共共闘ではない。

篠原：「1回目は、うまくいって、2回目は、簡単だった」という話でしたよね。

岩崎：2回目までは、社共共闘だった。

篠原：奥田先生は、この労線統一には反対だったのですか。

岩崎：反対でした。だけれども、知事だから、あまり言わなかった。

篠原：具体的に、先生は言えないのに、どうして奥田先生が反対だということが分かったのですか。

岩崎：相談には、しょっちゅう行っていたから。

篠原：岩崎先生が奥田知事のところに相談に行っていた。どんな相談ですか。

岩崎：毎年、県評の運動方針を書く時には、必ず会議を開いてもらったりしていた。

篠原：その中で、「労線統一の動きがありますけれども、知事の考えはどうですか」と聞いていたのですか。

岩崎：いいえ。労線統一については、太田派全体が反対だったから。

山田：確かに、太田派は最後に飛び出していきますからね。奥田先生も、そういう立場で

反対していらっしやったということですね。

岩崎：はい。

篠原：ただ、奥田先生は、このままでいいという考えだったのですか。

岩崎：もう、面倒くさくなっただろうね。

山田：この間の県評をどうするのかで？

岩崎：はい。

山田：それは、ある意味、どうにかしようとしても、どうにもならないのではないかと
いうことですか。

岩崎：はい、そうですね。

篠原：その面倒くさくなっただのが、4選目の不出馬へと繋がっていく？

岩崎：はい。繋がっていきました。

篠原：奥田先生は、この時に、特に動きはしなかった？

岩崎：しなかったです。

山田：逆に、先ほどの話で、県評の中において、共産党系の組合もあり、岩崎さんがうまく
まとめてらっしやったから、選挙の時に、社共共闘ができる基盤になる。ところが、
労働戦線統一をめぐる対立は、社共共闘に対する影響は当然あったと思うのですが。

岩崎：松田君になって、3回目の奥田選挙の時には、社共共闘が崩れる。

山田：それは、県評自身が、松田事務局長になって、全体的に共産党から距離をとるよう
になったからということですか。

岩崎：そうです。社共共闘であることについて、松田君は疑問を持っていた。

篠原：共闘する必要がないと？

岩崎：はい。むしろ、それよりは労働組合で民間と一緒にやってやったほうがいいのかという
考え方で、3回目の選挙の時には、社共共闘ではなくなる。しかし、あの時、奥田さんは
動けなかったから、奥さんを連れて、全部、共産党系を回った。

山田：それは、個人の判断で、ということですか。

岩崎：はい。

山本：僕が聞いたらおかしいのかもしれないですが、奥田さんの日記を読んだら、奥田さ
んは日本共産党を嫌いなのです。そういう奥田さんの気持ちと、岩崎さんは、どのよう
に話されてきたのですか。

岩崎：あの頃は、こっちに力があったから、奥田さんは、私には文句を言わなかった。だ
けど、松田君の時代になって、共産党嫌いが出た。だから、3期目については、社共共闘
が壊れてもいいという考え方になったのではないか。

山田：それは、奥田八二氏ご自身が、ということですか。

岩崎：そうです。奥田さんが「うん」と言わなければ、社共共闘をつぶすわけにはいかな
い。松田君の考えで。あの時に、知事はそっちに乗った。

篠原：ただし、奥田先生は、労線統一には反対なんですよ？

岩崎：あの時は、どうしようもないと思ったのではないか。

篠原：もう1つ、それと関連してなのですが、この時は、具島先生などもおられたと思うのですが、奥田県政を支えた学者の人たちは、どういう考えだったのですか。

岩崎：あの頃は、学者文化人の会もばらばらになっていた。岩本先生は鹿児島に帰ってしまいうし、具島先生は高齢になられるし。もともと、具島さんは社共共闘派だったから、共産党との関係が薄くなっていくような労働組合からは、だんだん嫌われてしまった。だから、具島先生への講師のお願いなども、かなり減った。

山田：講師というのは、組合が開く？

岩崎：労働講座です。

山田：社共共闘派というのは、県評の中においては、もともと、ある程度中心的な存在だったのが、次第に労線統一問題の過程等々で少数派に転じていく？

岩崎：そういうことですね。私がやめたくなったのも、その辺だった。

—連合結成と福岡県評—

山田：こういうことをお聞きしていいのかわかりませんが、長い間、事務局長をしていらっしゃって、実際に交代されますが、その契機というのは、どういうことだったのですか。ある意味、「長くやられたから」ということですか。それとも、別の理由があったのですか。

岩崎：私自身が、嫌気がさしていた。

山田：それは、どういう点で？

岩崎：もう、みんなが言う事をきかなくなってきた。

山田：岩崎さんが言う方針に対して？

岩崎：私の指導力が落ちてきたということ。あの頃、山本君は私の力をどのように見てた？

篠原：山本先生は、今、席を外しているのですが、少しお待ちいただけますか。しかし、私は岩崎先生の力が落ちたとは捉えにくくて、この時も県知事は奥田先生で、奥田先生の立役者が岩崎先生なので、実力者だったと思いますが。

山田：事務局長が変わる時の理由をお伺いしていて、ご本人の指導力が落ちてきたから、続けるのが嫌になったとおっしゃるのですが、山本先生は、どう思いますか。

山本：それは、公的私的、松田さんが色々花火を打ち上げたので、言えない部分もありますが。

篠原：松田さんは、岩崎先生を降ろそうとしていたわけですよ。

山本：これは、労線とかは関係ない。岩崎さんを降ろして、自分が事務局長になりたいというのは、ものの価値観を共有するとか、反対するとか関係なく、岩崎さんを降ろしたいと。結構、前からだった。

篠原：もしかして、個人的に仲が悪かったのですか。

山本：仲が悪いというよりも……。

岩崎：私は、おかしいと思っていた。

山本：そういう時に、労線問題で、岩崎さんが中央から見たら左で、……九州ブロックを収めようと。これは誰かに変えないといけないと。岩崎さんの言葉を借りれば、おかしいかもしれないけれども、松田さんを上手に利用して、松田さんを事務局長にした方がいいという動きもあって、「仕方がない、松田で」ということになった。労線が右に行く、いかないということではなく、その辺のしがらみなどをひっくるめながら、松田さんという人が出てきた。それしか考えられない。じゃないと、誰もあの男には入れない。

篠原：松田さんというのは、岩崎先生と同じくらいの年なのですか。

山本：若いです。

岩崎：10歳以上、若い。

篠原：ということは、まだご存命？

山本：まだ、元気にしています。

岩崎：でも、何もしていないけどね。

篠原：しかし、選挙で彼が事務局長に通るわけですよね？

山本：それは、先ほども言ったように、労線の関係で産別から指導が来ている。松田さんを据えて右に……福岡も連合への産別の流れがあったので、松田さんになった。

篠原：この時に対立候補は出ましたか。

岩崎：出ていない。

山田：官公労系も同じだと見ていいのですか。

山本：官公労中心で、中央の書記長をしていた真柄が、1週間に1回ぐらい、福岡に来ていた。

山田：極端な言い方をすれば、総評中央の意向が？

山本：岩崎を潰せと。

山田：岩崎さんが、九州の中の各県の県評を含めて、影響力があったということですか。

山本：そうですよ。

岩崎：各県評の中でも、私を支持する人間は、とても多かった。

篠原：ということは、岩崎先生の力が衰えたのではなく、強すぎた故に中央から押さえられた。

山田：路線がある程度一致していれば、そういうことはなかったかもしれないが、中央との路線が、どんどん解離していくわけですからね。

山本：松田さんを作ろうとする環境と、岩崎さんを事務局長から降ろすという環境が、中央の指導も含めて色々働いて、そうなった。岩崎さんに「残ってくれ」と言っていれば、岩崎さんは、やっていると思います。

篠原：私の不勉強なのですが、当時、北海道もある意味、似ているところがあったのですが、北海道はどういう動きだったのですか。

岩崎：北海道は、昔から東京の言うことは、よく聞くところ。中央との解離が少なかった。

山田：福岡、あるいは福岡を含めた九州の県評組織の特異性、ユニークさが見えてきますね。九州は自立的な行動をしていて、それが中央から見れば……。

岩崎：邪魔になったということです。

篠原：この連合への結成の際に、中央から人が来て、指導というか、圧力をかけていたということになるのですか。

岩崎：直接は来なかったよね。

山本：いえ、結構来て、松田さんとゴルフをやっていました。月に何回かは来ていた。かなり意図的に真柄さんを派遣して、松田さんを自分のところに懐柔するという気持ちが強かったのだと思う。来れば、福岡に泊まっているわけですから、他の組合と岩崎さんを排除する状況を作り上げていったのではないか。

篠原：福岡県議会議員、市議員も含めて、地方議員の人たちは、労線統一については、どうだったのですか。

岩崎：全然、関心がない。

篠原：しかし、ある意味、労組によって当選しているわけですよ。自分たちの支持基盤の変化には、無関心ではいられない気がするのですが。

岩崎：支持してくれるのは、単産だから。地域じゃないから。運動は地域でしてくれるけれども、指導は単産だから。

山田：組合が、どう動くかには、関心があるけれども。

篠原：全国レベルの統一とかは別に関心がないということですね。国会議員も同じですか。

岩崎：国会議員も同じです。

篠原：渡辺四郎に関しては、岩崎先生の力によって当選させたとおっしゃってますが、それでも、あまり関心がないのですか。

岩崎：四郎さん個人は関心があっても、自治労がそうになっていない。

篠原：地方議員も国会議員も、労線統一には関心がなかったということですね。

岩崎：あの人たちは、自分の選挙がどうなるかだけ。

山田：普通に考えれば、総評イコール社会党で一体化していて、総評自身、支持基盤が大きく変わろうしているということは、社会党自身の支持基盤の変化、実際に連合ができた結果……。

岩崎：そういう意味では、社会党そのものが弱くなったわけ。

山田：それに対する危機感、警戒感があるのは、しかるべきだと思うのですが。

岩崎：私もそう思っていた。左ばねが効くだろうと思っていただけでも、効かなかった。

篠原：当時、地方議員、国会議員は関心がなかった。中央からは労働組合の幹部が福岡に

来ていたということですが、労働組合の幹部というのは、今後の政党のあり方、当時の社会党でしたが、リベラル結集みたいな……。

岩崎：あの頃、言ってみれば社民党路線だったから、社会党という名前を捨てようと考えていた。

山田：89年に、いわゆる「おたかさんブーム」がありましたね。社会党にとって、その局面だけ見れば、まさにリベラル路線が支持を獲得した。特に女性の支持を獲得したが、それが良くも悪くも社民路線へとさらに流れていった？

岩崎：流れていきました。

山田：本来、支持基盤である労働組合に対する意識が、だんだん薄れていったわけですね。

岩崎：社会党一党支持が崩れたからね。労線統一で、他の民間が、こっちに来るならいいではないかという考えが社会党の中にもあった。

山田：例えば、同盟と総評がくつつくということで、同盟も、こっちにもってこられるのではないかと。

岩崎：私は「絶対、そんなことにはならないよ」と言ったけどね。でも、そういう夢を見た。社公政権協議が出てきたのも、それだった。あの頃、社会党と公明党が一緒になれば、かなり力がつくのではないかと考えた。

—連合結成前後の動向—

篠原：1989年に、全国レベルで、連合が結成されるわけですよ。同じ時期に福岡県評もまた、連合になる。

岩崎：私がやめたのが88年。私が辞めた翌年には、県評は解体だから。私は、12年ぐらいやったかな。

山田：75年から86年の12年間ですね。そのあと、連合ができるまでの3年間は、西鉄労組の松田事務局長時代です。

篠原：ちょうど89年前後の県評の動向についてなのですが、まさに県評センターというのが出来るわけですよ。

岩崎：県評を解体するために、県評センターができるわけです。

篠原：少し確認をさせていただきたいのですが、連合福岡が出来て、そこに行けない人たちが県評センターを作った？

岩崎：違う。

山田：活動の部分？

山本：そこに持ち込めない課題。政党支持の問題とか人権の問題、解放同盟の問題とか、そういう課題ですよ。

篠原：つまり、労働組合自体が、連合福岡に行く。しかし、持ち込めない課題。それは、どういう線引きがされるのですか。

岩崎：政治運動については全部だった。

山田：連合自身が、当時の建前としては、特定の政党との関係は作らない？

岩崎：作らないということでした。

山田：だから、県評の場合は、社会党と一体化だったので、社会党に関する運動、平和運動に関しては県評センターが担うということですね。ただ、全体的には、その部分も含めて、新しい連合が。結果的に出来ないのですが、やろうという考えは？

岩崎：そうですね。やろうという考えでした。

篠原：県評センターの目標は何だったのですか。

岩崎：「県評がなくなればいい」という考え方。地域運動みたいなものが壊れたほうがいいと考えた。

山田：県評センターを作った理由が、そうなのですか。

岩崎：はい。県評をなくすことによって、県評も同盟も全部、解散するという話だった。

篠原：連合の方に持っていくということですね。

岩崎：はい。

山田：政治活動のところが残りますよね。当面、それぞれの県評センターで。

岩崎：同盟は、そのまま残るわけ。

山田：完全に労働運動に特化して、政治活動は？

岩崎：しないということです。同盟の運動というのはそうだから。だから、選挙が非常に弱かった。

篠原：県評センターの将来像というものは、どういうものなのですか。作りたくて、作った組織ではないということですか。

岩崎：そうです。作りたくて作った組織ではない。

山田：ある意味、もう、最終的には自然消滅？

岩崎：はい。

山本：あれは、確か5年の時限があった。だから、5年のうちに、解放同盟の人権の問題あたりも、連合に持ち込めるような状況まで柔らかくしなさいと。社会党支持もやめて、平和運動、政治活動も5年以内に変わらないといけないと。連合的になりなさいと。5年というスパンの中で……。

岩崎：逆に言えば、県評の時には、選挙運動で社会党に金を出したから、選挙資金も用意したわけだから、そういうのも、連合は邪魔だった。

篠原：だから、県評センターを作った。

山本：同盟は友愛会議を作って、民社党との支持協力関係の見直しを、向こうも5年以内にやったはずですよ。

岩崎：やったはずなんだけど、それで、県評の持っていた政治に対する機能というものの全部消したかった。

山本：それは、そうですよ。

篠原：非常に汚い話かもしれませんが、県評が持っていたお金は？

岩崎：松田君が持って行った。

篠原：県評センターに持って行った？

岩崎：そういうことです。

篠原：県評センターに、ということですね。連合福岡には、何もお金がない？

岩崎：はい。

篠原：この県評センターが5年間続くわけですよ。この間に、奥田選挙が1回あった。

岩崎：その時には、社共共闘はない。

篠原：もう、力がなかったということですね。

山本：連合さんも支持協力関係で関わってきた。

岩崎：あの時、松田君は、「連合も奥田をやるから」と言っていた。

篠原：5年で解散したのですか。

山本：解散した。

岩崎：解散せざるを得なかった。

篠原：また、お金の話になりますが、県評センターのお金は使い切ったのですか。

山本：それは分かりません。

篠原：県評センターは5年間の中で、政治的な要求を、やや穏健にするのが大きな課題だったということですが、実際に、連合福岡の方に再合流出来たのか。

岩崎：出来なかった。

山田：県評センターを作るというのが、ある意味、上の意向に沿う形という理解でいいのですか？

岩崎：そうです。それから、県評をなくすということに対する抵抗が強かったから、それを抑えるためには、県評センターを作らざるを得なかった。

篠原：福岡県以外でも、県評センターは出来たのですか。

岩崎：出来ているところもあるし、出来てないところもある。

篠原：政治的運動が激しかったところは、県評センターが出来ているということですか。

岩崎：はい。大分などは、その辺が残ったのではないかな。

篠原：村山……。

岩崎：あれは、村山さん個人の力があったからね。

篠原：今も、あそこは、民主党と社民党の連合会派がある。

山田：お話を伺っていて、分かる部分もあり、分からない部分もあります。岩崎さんに言ってもしょうがないと思いますが、確かに、同盟系と総評系の支持政党が違う。一緒になるから、その部分は切り離すというのは分かるのですが、結果的に、特定の政党とのつながりを失うことになるわけですよ。それは、ある意味、労働組合の運動としての

政治的な力を、かえって減らしているというように見ることもできるのですか。

岩崎：減らしてしまった。

山田：連合自身が政治運動をしない。

岩崎：連合は、もともと政治運動はしないところだからね。

山田：労働運動に？

岩崎：同盟もそうだったし、全労協もそうだったけど、政治運動はしたくなかったわけ。

山田：ところが、総評だけ頑張っていたと？

岩崎：そうです。総評だけは社会党支持で頑張った。だから、総評が潰れば、社会党も潰れるという考え方。

山田：実際、そうですね。

篠原：連合は、「政治運動はしない」というのは、ある意味、「特定の政党を支持するような運動をしない」ということですか。

岩崎：それだけではない。政治運動そのものをしなかった。

篠原：その政治運動というのは、どういうことになりますか。

岩崎：例えば、資金も集めるし、運動もやる。両方やらないといけない。県評の場合には、知事選するためには、組合員が毎月一人200円積み立てていた。

篠原：連合は、そういうことはしないと。

岩崎：もともと、お金を集めないということだから。

篠原：しかし、連合は、部分的に協力するところには、協力することになりますよね？

岩崎：「協力する」のと、「支持する」のとは全然違う。

山田：結果的に県評センターに移行して、5年間活動して……。

岩崎：それも、ほとんど活動しなかった。

山田：そう考えると、それまで県評が担ってきた福岡の平和運動は、県評が連合に移行し、県評センターが出来た結果、活動が停滞したと？

岩崎：なくなった。消滅したということ。私はそう思っている。

山田：従来、労働組合がやっていた……。

岩崎：政治活動は一切なくなった。

篠原：それで、連合福岡が出来るわけですが、それも、とても成功とは言えないわけですよ。

岩崎：要するに、金も出さず、運動もするというのは面倒くさい。メーデーの日に、集会をやらなくなったでしょう？ どんどん減っていくわけです。つまり、運動というのは、やり続けないと、どんどん減衰していく。

篠原：現状を維持するだけでも、かなりの運動が必要ですよね。

岩崎：そうなんです。

山田：変わっていったというのは、確かに、時代の変化もあるし、労働組織の連合の結成

ということもあると思いますが、担い手の世代の違いというのもあるのですか。

岩崎：それもあると思います。しかし、ストライキがなくなった。

山田：ストライキの経験もなくなった。

岩崎：それから、職場集会そのものがなくなったわけだから。つまり、組合が組合員に奉仕する考え方がなくなるということ。連合の考え方は、はっきりしている。運動するの
が、面倒くさい。

篠原：繰り返しになるかもしれませんが、ある意味、奥田県政を作る力があつた福岡の労働組合が非常に衰えたという感じがしますが。

岩崎：力がなくなった。

篠原：それは、本当になくなったと捉えているのですか。それとも……。

岩崎：なくなった。今も、連合は何もしていない。選挙運動もしていない。

篠原：一方で、民主党が出来た。

岩崎：しかし、民主党は、労働組合のために何かをしてくれる政党ではない。

篠原：連合は、民主党の最大の支持基盤ということにはなっていますが、民主党が何かしてくれるかという
と、特に何もしてくれない。

岩崎：また、今の民主党は、出来ないよね。

篠原：そうですね。

岩崎：だって、福岡で考えてごらん下さい。最盛期は、県で社会党の衆議院だけで 8 人いた。それは、全然違うよね。党だってそれだけしてくれれば、力の入れ方が違う。

篠原：連合の結成というものが、基本的には、労働組合を弱くしたということ？

岩崎：弱くしました。それから、同時に社会党を潰した。

—連合結成後の労働運動—

篠原：先生が分かる範囲で結構なのですが、福岡の一般市民は、こうした一連の動きをどのように評価していたのですか。

岩崎：関心なかったのではないかな。

篠原：奥田県政は、労働組合員とかではなく、一般の市民が支持したから作られた政権ですよ。奥田県政に貢献してくれた一般市民は、こうした労働組合の動きには関心がなかった？

岩崎：なかったです。労働組合がすることは、見ている以外に方法がない。そうはいっても、例えば、最低賃金や地域運動など、私たちはやれることは全部やった。それがなくなったわけだから、市民との接点がない。国民春闘路線というのは、それを作るための路線だった。

山田：ある意味、労働組合自身が社会の公的な利益を生み出すための運動をやっていた。

それは、逆に言えば、フリーライダー、何もしなくても、その恩恵には与れる。多くの

人は、そこに気がつかないまま見ていた。ところが、労働組合が、そういう運動自体をしなくなったというのが、今の状況。公的なものを生み出す力が、日本社会の中でなくなった。

岩崎：例えば、東京都知事の舛添さんの今の動き。あれは、東京都評や東京地評で力があれば、何か運動が起こっていると思う。

山田：それは、舛添氏を降ろすための運動ということですか。

岩崎：新しい知事を作ると思います。

篠原：すぐに知事候補を立てて、組織を作って動き出す。

山田：リコール運動をやるとか。

篠原：ある意味、それは奥田先生が当選した時の前夜みたいな状況が既に起こっていると。

山田：本来、力があれば、ということですね。

岩崎：また、する気があれば。今、する気がない。

篠原：ないですね。

岩崎：あの頃の福岡県評だったら、今の都知事みたいなことをしていれば、私物化ということだけでもって喧嘩する。

山田：今の労働組合の現状と、岩崎さんがやられた頃の労働組合というのは、だいぶ質的な性格が違うのかなと思いますが、あの時に、政治運動をやる、奥田県政を作るということは、労働組合にとって、どういう意味があったのですか。

岩崎：あの時は、労働組合のためにやったのではない。県民のためにやった。そこが違う。

山田：そこが、ある意味、労働組合のあり方に大きな違いがあるように思います。本来は、労働者の権利を守るというのが出発点ですよ。

岩崎：しかし、国民春闘と言っていた時代。国民春闘路線といったのは、国民全体のために戦うということ。その考え方がなくなれば、何もしない。

山田：自分たちの利益をどう守るのかという話でしか動かなくなるということですね。

篠原：そういう意味で、岩崎先生は、労働組合を使った市民運動にずっと従事されていた？

岩崎：市民運動でしょうね。

篠原：しかし、連合の労線統一は、まさに労働組合のための運動になっているわけですよ。それで、没落していくということですね。結局、市民の支持も関心も得られなくなった。

岩崎：それから、組合費について言えば、何かあった時に、自分の首切りを守ってくれるところだということがなければ、労働組合なんて成り立たない。

篠原：誰も組合費を払いたくないですよ。

岩崎：そうでなくても、今、組合費が余っている。

山田：スト打たないから、余っていますね。

岩崎：また、それを使おうともしない。また、使うためには、組合のために使うというこ

とを理解してもらわなければ、執行部も使えない。その辺の考え方が、今、労働組合にはなくなっている。組合費を集めるのは、組合員のために集めるのであって、執行部のために集めるのではないから。そういう考え方を、労働組合の指導部が持たなくなったということ。今やゴルフばかりするわけだから。

篠原：奥田県政を作った時の福岡県の労働組合と、今日お聞きする労働組合が同じ団体とは思えない。

岩崎：確かに、今、言われたように、同じ団体と思えないほど差があるよね。

篠原：奥田県政のところを見ると、全国でも非常に主導的な強い積極性を持った組織、運動だと思いますが、連合結成に関しては、本当に主体性のない団体。

岩崎：それは、組合の集合体だからです。企業別組合の集合体ということが、決定的に弱かったのではないか。

篠原：それでも、奥田県政を作ることはできるわけですね。

岩崎：指導によってはね。

篠原：岩崎先生が事務局長を退かれた後、具体的に先生は、どのような活動をされていたのですか。

岩崎：自分で日本語学校を始めた。それで、しくじった。

篠原：それは、労働運動とはまた別の？

岩崎：県評をやめたらどうするかを考えた時に、福祉団体の役員になるとか、議員になるとか、私はそういうのが嫌だった。

篠原：よく聞きますよね。

山田：ある意味、天下りみたいな。それは、ご本人が望まれなかったということですか。

岩崎：はい。私が組合をやり始めた頃に、日放労の組合員からも言われたことがある。「おまえさん、今度、役員になるのではないか」とか、「管理職になるのではないか」とか。労働組合をやる以上は、そのように思われなくなかった。

篠原：もともと、どういう形であれ、労働組合の活動が終わったら、天下りはしたくないと。

岩崎：はい。自分で生きて行くしかないと思っていた。

篠原：県評の事務局長をやめた後、退職金みたいなものはあるのですか。

岩崎：退職金はありますよ。日放労からも、NHKからも。

山田：事務局長をお辞めになられた後も、しばらくは、NHKの職員でいらっしゃったわけですね。

岩崎：半年。

山田：それで、定年を迎えられた？

岩崎：はい。

山田：事務局長を辞められてからは、具体的に県評との関わりというのは？

岩崎：もう、なかったです。

山田：活動を積極的にということは？

岩崎：ないです。

山田：県評センターにも、関係はなかったですか？

岩崎：全然、関係なかった。県評センターは、お呼びでない。

篠原：しかし、奥田県政を作ったという意味では、実力者なのに。

岩崎：そのように労働組合は考えない。自分のことが先だから。

篠原：先生は、事務局長を退かれた後、労働組合や……。

岩崎：私が今にして思えば、奥田さんがいる頃に、県立女子大の講師にでもなれなかったかなと思う。私は東大の国文卒で、専門だから。県立女子大の国文に当時、そういう先生がいなかったから。あそこに入っていれば、私は食べて行くのに困らなかつたらうなど。

山田：その時は、そういう考えはなかった？

岩崎：はい。あの時に頼めば、県立女子大の先生には、なれたらうね。

篠原：岩崎先生の前とか後の事務局長の方というのは、辞めた後、大体、天下りのポストに行っているのですか。

岩崎：行っていますね。

篠原：岩崎先生の後も行っているのですか。松田さんとか。

岩崎：松田君は、行ってないな。行く必要がなかった。

山田：行く必要がないというのは？

岩崎：金持ちだということではないか。それと、西鉄労組が面倒をみてくれていた。

山本：確か、西鉄労組に帰りましたよ。

篠原：帰るといのは？ 西鉄労組も定年がありますよね。

岩崎：定年までは、組合の役員になって。

山田：だから、西鉄労組の方の専従になったということですね

篠原：その後、岩崎先生は、福岡県の労働組合との関係は？

岩崎：全くない。党との関係もなくなった。

山田：党員では、いらっしゃったのですか。

岩崎：党員でもなくなった。

篠原：今も社民党の党員とかでもない？

岩崎：ないです。

篠原：いつぐらいまで、社民党の党員だったのですか。

岩崎：今里さんが知事選に出た時に、辞めた。

篠原：あの時に辞めたのですか。

岩崎：今里先生を支持しないと社民党が言ったから。

山田：そういうことなんですね。

岩崎：その後、私は辞めました。

篠原：あれは、2003年だったですかね。あの時、社民党は支持しなかったのですか。

岩崎：しなかった。それで、私は頭に来たから。共産党は支持した。共産党で、私が気に入らなかったのは、「まだ早い。もう少し待たないと逆に壊れてしまいますよ」と言ったのに、共産党が先に支持を打ち出した。社会党は、それで一層、右に寄った。

篠原：共産党が支持しているとにくい。その辺のタイミングがそろえないといけなかったのですね。

岩崎：ボタンの掛け違いよね。

篠原：そして、今里先生は落選しましたね。

山田：その段階で、社共共闘の可能性はあったのではないか。

岩崎：私はあったと思う。

篠原：うまく、そこを合わせれば、そしたら、奥田先生の再来ができた。

岩崎：はい。そうすれば、中央官僚の天下りを知事にしなくて済んだよね。

山田：そうですね。麻生さん、今は小川さんですね。確かに、県民が自分たちのところから出すということが、福岡県では長らく続いていませんね。

岩崎：それが伝統だったからね。

篠原：ちなみに、今の連合福岡というのは、どういう活動をしているのですか。

山本：やってない。

岩崎：大体、毎年の方針もない。

山本：極端に言ったら、広島、長崎の原爆の集会にも、連合という形で行ってないのではないか。連合の中で支持する労働組合あたりが、社民党と一緒にあったりしてやっている。今は、運動をほとんどやってないです。

篠原：今日は、ここでまとめさせていただきます。どうもありがとうございました。

(第4回聞き取り 終)